

目次	研究班のあり方について	1
	2008(平成20)年度「指定研究」研究経過報告	2
	2008(平成20)年度「一般研究」研究結果概要	10
	海外学会参加報告	17
	国内学会参加報告①②	18, 20
	学術共同研究報告	22
	研究調査出張報告	23
	2009年度全国大学史資料協議会西日本部会第1回研究会報告	25
	彙報	27

## 研究班のあり方について

真宗総合学術センター長 乾 源 俊  
真宗総合研究所長

真宗総合研究所は1981年の創設以来本学における研究の拠点として位置づけられ成果を積み上げてきた。真宗による学術の総合という理念により、特定の研究員をおかず教員が研究員を兼ねるといった形態のもとに研究班が組織され、現在6つの指定研究、4つの一般研究、並びに大谷大学史資料室という構成になっている。こうした研究班の構成はいかにあるべきか、その時どきに応じた検証は常になされねばならないだろう。その課題と将来像について、研究所委員会では作業部会を設け検討をかさねてきた。そこでの議論をふまえながら、研究所の研究組織のあり方について要点を整理しておきたいと思う。

### 指定研究と一般研究

組織再編の目的は、ほかでもなく高い水準の研究成果を挙げることにあり、それを内外にひらいてゆくことである。そのために限りある人材をいかに配分し全体を機能させるか。施策のひとつは、一般研究の共同研究を科学研究費補助金によるものへと統合することである。外部の目で評価されることによる研究の質の向上と、外部資金の還元による研究環境の改善を意図してのことである。また課題により大小さまざまな規模の班の編成が可能である科研費にくらべ、ひとつの枠のなかに抑えられる一般研究の意義は相対的に小さくなっている、ということもある。ただし個人研究については現状のままとする。一般という概念がなくなれば、研究所の研究はすべて指定研究ということになる。仏教研究により社会に寄与するような、本学としては非取り組まねばならない課題とその条件となる。研究班は、学長が責任者となり主導的役割をはたすものと、学長が責任者を依頼するものとにわかれる。構成は、責任者、実務担当者、研究員、嘱託研究員、研究補助員となる。

### 研究プロジェクトと学術交流

このような構成の研究班の性格をより明確にする、プロジェクト型の研究班ということになろう。そ

うであるためには、ふさわしい計画の立案と、成果に対する厳正な評価が必須の要件となる。科研申請のための準備型の班も、期限をつけて設ける。一方で、研究所にはプロジェクト型の研究班による研究には集約できない重要な業務が存在する。それは学術交流ということばで括ることができるだろう。その内実は、海外の提携校や研究機関との経常的な交流から、学会・シンポジウム等の開催まで、多様である。これらの実務にあたる組織は、プロジェクト型のそれとは異なる。その活動が経常的か臨時的かにかかわらず、交流計画の立案と遂行、相手先との交渉などがおもな業務となり、責任者と実務担当者のほかは、研究員をもつ必要はない。たとえば共同開催の学会での発表者などは、全学の教員が対象となる。学術交流班はこうしたよりオープンな組織である。プロジェクト型と学術交流型と、この二種の研究組織は、課題と分野により重なりあうこともあるし、重ならないこともありうる。ただし責任者と実務担当者が両組織のそれを兼務しないことが条件となる。研究所の基幹業務のひとつである、国外における研究動向の調査などについても、この後者の組織のあり方に準ずる。

### 評価の仕組みと環境改善

こうした組織が機能するには評価の仕組みの確立が不可欠である。プロジェクト班は3年の計画のはじめとあとに厳密な評価を受ける。責任者はプロジェクト期間の終了とともに交替する。評価機関としての研究所委員会の役割はいま以上におおきなものとなろう。また学術交流については、所長と責任者、実務担当者による組織が研究所内に設けられる。研究動向の調査なども、主事を中心に研究補助員も含めた同様の組織が設けられる。責任者、実務担当者等のエフォートの確保は最重要の項目となるが、これを授業の責任時数(さしあたり1コマ分)に換算することによって行う。もとより組織の編成が課題をすべて解決するわけではないが、研究所の研究の充実発展に寄与すればと願ってのことである。

# 2008(平成20)年度「指定研究」研究経過報告

大谷大学親鸞聖人750回御遠忌記念  
特別指定研究

## 親鸞像の再構築

チーフ・教授 門脇 健  
(宗教学)

### 【研究班の目的】

本研究班は、2011年の親鸞聖人750回御遠忌に向けて、過去50年間における親鸞研究の動向を整理・検証し、これからの親鸞研究に新たな展望を開くことを目的としている。現在、「親鸞像の再構築」という課題の下、4つのプロジェクトを設けて研究を推進している。

- a. 史的な親鸞像の再検討
- b. 思想教学の検証
- c. 現代における親鸞思想との出会い
- d. 文献目録の作成

### 【公開研究会の開催】

上記のプロジェクトを推進するためにこれまで公開研究会を重ねてきたが、今年度も引き続き学外から講師をお招きして研究会を開催した。以下その梗概を記載する。

- ・第11回公開研究会(2008年4月22日16:10~17:40)  
講師:佐々木正氏(萬福寺住職) 題目:親鸞伝の光と影~正明伝をテキストにして~

本報告では、赤松俊秀氏の『親鸞』をひとつの到達点とするような実証主義的歴史学からは等閑視されてきた『親鸞聖人正明伝』(伝存覚作、五天良空開版)を取り上げ、その内容を再評価された。佐々木氏は、親鸞の思想の側からの内在的アプローチによって、その内容を全面的に史実として公認するという新しい見解を示された。これまでの歴史学における方法論との隔たりから課題を残しつつも、今後、親鸞像を再構築していく際に伝承史料を再検討していく上で重要かつ斬新な視点が提起された。

- ・第12回公開研究会(2008年5月13日14:30~16:00)  
講師:井上円氏(高田教区教化研鑽室聞思学場) 題目:「名之字」考

本報告では、『教行信証』後序の「名之字」が何を指

すかという問題を取り上げられた。

まず、「名」の字を「みよう」と読むべきではないかとされ、これは「姓名を賜うて、遠流に処す」とある「姓名(しょうみよう)」との対応で使われていることから、「名之字」とは罪名とされた「善信」の字であるとし、「善信」は房号ではなく実名であると結論づけた。「善信」は、親鸞が『選択集』を読む中で、法然の弟子として法然の教えを受けとめるという立場に立った時の名告りであり、一方「親鸞」は、『浄土論』『浄土論註』の課題を自分も荷おうとした、自らの回心を教学的に確かめていこうとする名告りであると指摘された。また罪名の「善信(よしごね)」とは、よく女と共寝する男という悪意が込められているのではないかという、興味深い見解も提起された。

\*また、上記公開研究会のほか、研究員の報告を基にした研究会を開催した。

- ・2008年9月11日13:30~16:00 報告者:一楽真氏(研究員) 講題:「思想教学の検証」について 報告者:門脇健氏(研究班チーフ) 講題:「現代における親鸞思想との出会い」について
- ・2008年9月18日16:10~17:40 報告者:東館紹見氏(研究員) 講題:「史的な親鸞像の再検討—親鸞伝研究の歩み—」

一楽氏からは親鸞の思想研究の動向について報告していただき、また門脇氏からは、過去50年間の日本の時代の特色を、宗教学・社会学的な見地から俯瞰していただいた。また東館氏は親鸞伝研究の歩みについて整理していただいた。各研究員より、それぞれのプロジェクトの課題が提示されたことによって、本研究班の方向性について議論を深めることが出来た。

### 【公開研究会の成果報告(出版)】

過去12回にわたって行われてきた公開研究会の内容を、今年度冊子化して公開した。

- ①『親鸞像の再構築』第一輯 2008年10月31日発行  
(大谷大学真宗総合研究所)
  - ・親鸞の俗称—司田純道説をめぐりて— 小山正文
  - ・『親鸞聖人御因縁』の展開 塩谷菊美
  - ・善鸞義絶状の伝来とその偽作説 平雅行
- ②『親鸞像の再構築』第二輯 2009年1月30日発行  
(大谷大学真宗総合研究所)
  - ・真宗教育者、広小路亨先生の親鸞像  
—「親鸞にみる“青年の勇気と決断”」を読む—

福島和人

- ・この時代に「本願を聞く」ということ  
—何を考えるべきか— 本多弘之

③『親鸞像の再構築』第三輯 2009年2月28日発刊  
(大谷大学真宗総合研究所)

- ・この時代に「本願を聞く」ということ  
—何を考えるべきか(2)— 本多弘之
- ・「名之字」推考 井上円

## 【御遠忌記念論集に関して】

これまでに行ってきた公開研究会の成果を踏まえ、また研究員からなされた報告をもとにして、親鸞研究の動向を検証し、現在どのような課題があるかを議論してきた。そして「親鸞像の再構築」という課題を具体的にどのような形で結実させていくのかを重ねて検討してきた。

その結果、本研究班のプロジェクトである、「a.史的な親鸞像の再検討」「b.思想教学の検証」「c.現代における親鸞思想との出会い」のそれぞれのテーマに沿った論集を、2011年の御遠忌に合わせて記念出版することを正式に決定した。論集名は『親鸞像の再構築—親鸞を訪らう』(仮題)である。真宗学・仏教学・史学・哲学・文学・社会学などの様々な専門分野の研究者の協力を仰いで、親鸞像の構築に新たな展望を切り開くことを目的として、論集の刊行を目指していくことを確認した。そして、2009年2月17日(13:00~15:00)に執筆予定者を招聘し、本プロジェクトの趣旨を報告する執筆説明会を開催した。

## 【文献目録の作成】

「d.文献目録の作成」のプロジェクトでは、前回の御遠忌以降の50年間(1961~2011)にわたる親鸞研究を概観するのに資するデータベース並びに文献目録の作成を目指している。本研究班で定めた作成方針に則って継続的に作業を遂行中であるが、本年度は特に日本語文献の単行本について、『仏教書総目録』に基づくデータ入力を1993年分(No.10)まで終了した。また、学術雑誌所収の論文については、『親鸞教学』と『真宗研究』掲載論文のデータ入力作業中である。

## 国際仏教研究

## 諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の整理・収集・公開

チーフ・教授 ロバート F. ローズ  
(仏教学)

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。本年度も英語班、ドイツ・フランス班・中国班の三班に分かれて研究活動を進めてきた。各班の研究経過の概要は以下の通りである。

## 〈英語班〉

## I. 翻訳研究活動

- (1) *An Anthology of Modern Shin Buddhist Writings* について  
長年に渡って継続してきた真宗近代教学(清沢満之・曾我量深・金子大栄・安田理深)アンソロジーの英訳出版事業については最終段階を迎え、本年度は安富信哉教授(元国際仏教研究チーフ)に序文を執筆いただき、当研究班による編集・校正作業を終えた。今後、ニューヨーク州立大学のマーク・ブラム教授(英語班嘱託研究員)を通してニューヨーク州立大学出版(SUNY Press)による最終的な編集・校正を経た上、2009年度中に発行される予定である。
- (2) 佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」翻訳研究について  
近代教学アンソロジーに続くプロジェクトとして、佐々木月樵の「大谷大学樹立の精神」を英訳することに決定し、後期からそのための準備に着手した。

## II. 学会参加・海外出張

- (1) 第53回国際東方学会議  
2008年5月16日(金)東京都千代田区の日本教育会館にて開催された第53回国際東方学会議(シンポジウム5「仏典翻訳の過去・現在・未来—『日英基準訳語集』構築に向けて」)に、小澤千晶嘱託研究員、マイケル・コンウェイ補助員、アダム・キャット補助員が参加した。
- (2) 第15回国際仏教学会大会(The XVth Congress of the International Association of Buddhist Studies)  
6月23日(月)~6月30日(土)アメリカ合衆国ジョージア州アトランタ市のエモリー大学において開催された

第15回国際仏教学会大会に箕浦暁雄研究員が参加し、24日に初期仏教のセクションで“Sthiramati and Yaśomitra”という題目で研究発表を行なった。

(3) オックスフォード円卓会議 (Oxford Round Table)

7月13日(日)～7月18日(金)英国オックスフォード市にて開催されたオックスフォード円卓会議に、安富信也教授が参加し“Beyond Attachment”という発表を行なった。

(4) エトヴェシュ・ロラード大学 (ELTE) 訪問

9月11日(木)～9月14日(日)ロバート・F・ローズ国際仏教研究チーフ、井上尚実研究員、マイケル・コンウェイ補助員が学术交流提携校であるハンガリー (ブダペスト) のエトヴェシュ・ロラード大学 (ELTE) を訪問し、12日にはローズ教授が中国仏教 (天台における三諦三観の思想) に関する英語講演を行なった。

(5) ヨーロッパ日本研究協会第12回国際会議 (12<sup>th</sup> International Conference of the European Association for Japanese Studies)

9月20日～23日に、南イタリアのレッチェ市にて開催されたヨーロッパ日本研究協会第12回国際会議にローズ教授・木越准教授・井上研究員・コンウェイ研究補助員が参加し、“Where Have All the Pure Lands Gone? – Challenging and Developing Doctrinal Authority in Modern Shin Buddhism –” (浄土は何処へいったのか? : 近代真宗における教法的権威への挑戦とその発展) というタイトルで、近代真宗教学における教権と教法的進展のダイナミックスを明らかにするパネル発表を行なった。

(6) サンフランシスコ大学「アジアにおける宗教とグローバル化」学会

2009年3月13日～14日に、サンフランシスコ大学の環太平洋センターで開催された「アジアにおける宗教とグローバル化」学会に井上研究員が参加した。学会終了後、バークレー市の仏教大学院大学 (Institute of Buddhist Studies)・毎田周一仏教センター (Maida Center of Buddhism)・バークレー東本願寺等を訪問し、米国における仏教研究に関する情報を収集し交流活動を行った。

III. 公開講演会の開催

(1) 10月23日(木)17:30から19:00まで、響流館3階のマルチメディア演習室にて、タマサート大学のNicolas Revire氏による“An Overview of Dvāravatī Art & Iconography” (ドゥヴァーラヴァティー仏教美術と図像の概観) という題目の講演が行われた。

(2) 11月24日(月)16:10から18:00まで、響流館3階のマルチメディア演習室にて、佛光大学宗教系助理教授

の劉國威氏による“The Literature of the *Sngags kyi bklag thabs* (Method of Pronouncing Mantra) in Tibetan Buddhism” (チベット仏教におけるSngags kyi bklag thabs [真言読誦法] 文献について) という題目の講義が行われた (西藏文献研究と共催)。

〈ドイツ・フランス班〉

1. 2008年5月にドイツ・マールブルク大学で開かれた第6回ルドルフ・オットー・シンポジウムにおいて、藤枝真研究員が研究発表をし、廣川智貴研究員が言語仲介者として参加した。発表のタイトルは“Reines-Land-Buddhismus und ‚Nembutsu‘ als eine gegenwärtige Form inoffizieller Spiritualität” (浄土仏教と非公式的なスピリチュアリティの現代的形態としての念仏) であった。今回のシンポジウムのテーマは“Interreligiöse Verständigung zu Glaubensverbreitung und Religionswechsel” (信仰の広まりと宗教の変化 [改宗] に関する宗教間の相互理解) であり、世界各地から集まった発表者から、福音主義、カトリック、ヒンドゥー、イスラーム、チベット仏教など様々な宗教的伝統についての発表がなされた。

2. 2009年3月にドイツ・マールブルク大学で開かれたシンポジウム“Martin Luther –Biographie und Theologie” (マルティン・ルター: その生涯と神学) に村山保史研究員と藤枝真研究員が参加した。このシンポジウムはルターの生涯における様々な出来事を彼の神学上の転回点と結びつけて論じようとする一つの試みであり、2017年に迎える宗教改革500周年を目前にしたルター像の再検討である。

3. マールブルク大学神学部ディートリッヒ・コルシュ教授の著書*Martin Luther: Eine Einführung, Zweite Auflage* (『マルティン・ルター入門』第2版) の翻訳作業を進めている。前出のルター・シンポジウムに参加した際、村山保史研究員と藤枝真研究員がコルシュ教授と面談をし、翻訳に関する打ち合わせを済ませている。翻訳終了次第、出版という形での公表を計画している。

4. EPHE (フランス国立高等研究院) との2回目の合同シンポジウムを2010年5月に予定しており、発表担当の研究員が各自準備を進めている。

〈中国班〉

研究テーマ: 中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化

I. 大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」海外布

教関係部分の資料一覧作成

すでに調査が終了した中国東北地域に引き続き華北地域関連の綴資料(仮番号19~25)の一覧作成作業を行い、それぞれの担当者がデータベースの入力作業を実施中。さらに華中関連資料(仮番号26~)の調査にも着手している。

## II. 公開講演会および研究会の開催

[講演会]

2008年11月24日(金)16:00~18:00

於:メディアホール(響流館3F)

- ・映画『蒙古横断』をめぐる資料について  
新潟大学人文学部准教授 広川 佐保

2009年3月3日(火)15:30~17:30

於:マルチメディア演習室(響流館3F)

- ・満洲国の文教政策 京都大学大学院教授 江田 憲治

[研究会]

2008年5月14日(水)15:30~17:30

於:真宗総合研究所ミーティングルーム

- ・中国山西省大同・朔州市区の遼金元石刻  
日本学術振興会特別研究員・真宗総合研究所嘱託研究員  
井黒 忍
- ・中国山西省晋中地域の仏教遺跡について  
大谷大学教授 桂華 淳祥
- ・20世紀前半における東部モンゴル地域の仏教事情  
大谷大学教授 木場 明志

2009年2月19日(木)15:30~17:30

於:マルチメディア演習室(響流館3F)

- ・河南中部の仏教遺跡と金元碑刻  
日本学術振興会特別研究員・真宗総合研究所嘱託研究員  
井黒 忍
- ・中京大塔の初層壁面装飾について  
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員  
藤原 崇人

## III. 中国東北師範大学との上記テーマによる共同研究の推進

1. 2008年8月22日(金)~2008年8月27日(水)、浅見・桂華・松川の研究員、井黒嘱託研究員、木場招聘研究員(本学教授)の計5名は中国東北師範大学(吉林省・長春)を訪問し、程舒偉・曲曉範・劉景嵐・智利疆(共に東北師範大学)の研究者との共同研究会を行うとともに、吉林省内の通化市・集安市方面の史跡・仏跡および現在の宗教活動の現地調査を実施した。この間、通化師範学院の招きによる学術交流会において日中双方の研究状況を報告し合った。
2. 2009年3月24日(火)~2009年3月29日(日)桂華・松川の

研究員2名はモンゴル国ウランバートル市及びドルノゴビ県を訪問し、ドルノゴビ県ハマリン=ヒード寺院にて現在の宗教活動の現地調査並びに、1930年代に当寺院に弟子入りしていた日本人将校について聞き取り調査を実施した。

## 西藏文献研究

### チベット語文献のデータベース化

チーフ・教授 福田 洋一  
(仏教学)

本研究は、学内外のチベット語文献を調査・整理し、データベース化を進めることによって、チベット研究の基盤を構築し促進をはかることを目的としている。その目的を達成するために、2008年度は、以下の課題に取り組んだ。

#### 1. 大谷大学図書館所蔵チベット語文献のデータベース化

そもそもチベット語文献は、2つのグループに大別される。1つは、カンギュル・テンギュル、いわゆる「チベット大蔵経」である。そこに収録されている文献は、サンスクリット語ないし少数ながら漢語をはじめとするその他の言語からチベット語に翻訳されたものである。もう1つは、それ以外の、チベット人自身の著作、いわゆる「蔵外文献」、厳密にいえば、「チベット撰述文献」である。以下、この2つのグループそれぞれに対する2008年度の研究成果を、簡単に報告したい。

#### A. 北京版チベット大蔵経

本学図書館にはチベット大蔵経として、北京版、ナルタン版が所蔵されている。デルゲ版その他については、その影印版が所蔵されている。チベット大蔵経の研究としては、北京版に対するそれが中心となる。2008年度は、入力済みであった北京版カンギュル(仏説部)所収テキストの奥書テキスト・データに対する見直し・校正作業をおこなった。修正されたデータは2009年度中に、Peking Tripitaka Online Search(北京版チベット大蔵経オンライン検索)に追加し、公開する予定である。

B. 蔵外文献（チベット撰述文献）

本年度は、以下の2つの文献のテキスト・データベース化をおこなった。

i チベット語訳『大唐西域記』

清朝・乾隆帝の時代の初期に活躍した翻訳師クン・ゴンポ・キャブによって翻訳されたこの文献は、本学を除いては中国・北京の民族文化宮に版本の所蔵が確認されているだけであり、稀覯書として、既に臨川書店より「大谷大学所蔵西藏蔵外文献叢書」の第1冊として解説を付して影印出版されている。この研究では、この影印版にもとづき入力・校正作業を行ない、影印版で不鮮明な箇所については現物に当たり、万全を期した。

ii 『ミラレーパの十万歌』

本研究班では、すでに、この『十万歌』の著者ツァンニョン・ヘルカ（1452-1507）による別の2つの文献（『ミラレーパ伝』『マルバ伝』）のテキスト・データベース構築をおこない、これを公開している。ツァンニョンの著作には、口語的表現が数多く見え、またそれらは彼の故郷である西チベットの方言を反映しているといわれている。既に入力済みのデータに加え『十万歌』のデータを構築し、それを研究に用いることにより、ツァンニョンの、あるいは、15世紀末のチベット語の実態がより鮮明になることが期待される。データベース化にあたっては、開版年代が、数ある版本の中でも著作年代に近いと思われる木版本を底本に入力作業をおこなった。今年度は、すべての入力作業が完了した。

2. Otani Unicode Tibetan Language Kit のバージョン・アップ

毎年サンフランシスコで開催されるWorld Wide Developer Conference (WWDC) は、世界中の開発者が集い、必要な最新情報を得られ、かつ、Apple社の開発スタッフと直接会話できる唯一の貴重な場であり、これに参加することは、本研究項目——Apple社のMac OS Xに組み込まれているOtani Unicode Tibetan Language Kitバージョン・アップ作業——遂行上必要不可欠と考え、2007年度これに参加した。2008年度もこれに参加するため、6/7～6/17まで嘱託研究員・野村正次郎氏を派遣した。野村氏は、Apple社の開発スタッフと会合し、OS X 10.6向けバージョン・アップ作業に必要な情報を収集した。また、嘱託研究員Steven Hartwell氏とバージョン・アップに向けての打ち合わせ等をおこなった。

これとは別に、『ダラニ集』を調査し、正しく入力・

出力されない39の綴りの組み合わせが存在することを確認した。

3. 現地研究機関との交流・提携

2009年3月1日から30日までの間、中国青海省西寧にある青海師範大学の教授ギャエ・ジャブ (rGya ye bKra bho) 博士をお招きした。期間中、博士には、チベット・アムド方言の講習会をおこなっていただいた。また、3月26日には「チベット文学史における『サキヤ格言』の位置：サキヤ・パンディタ略伝と『サキヤ格言』について」とのテーマで公開講演会を、翌27日には、共同研究会として、博士の指導のもとグンタン・コンチョク・テンペー・ドンメ (1726-1823) 『ゲンデンの教えが栄える西岸・成就者の真実の語』の和訳を試みた。(その成果については、『研究所報』No.54に収録)

また、2008年11月13日には内蒙古大学教授エルデニバヤル博士をお招きし「内モンゴルにおけるチベット研究の現状」のテーマで、2009年2月28日には、元モンゴル国立大学教授テルビシ博士をお招きし「モンゴル・ゾルハイと暦学の伝統」のテーマのもと、それぞれ公開研究会を開催した。

4. オリッサ州SARASVATI研究所所蔵貝葉写本の研究

独自の貝葉写本文化が栄え、それが今に息づいている東インド・オリッサ州にあるSARASVATI研究所には、数多くの未整理貝葉文献が眠っている。この文献に対する研究を外部資金獲得のもとおこなうこととし、その申請に必要な基本的情報収集のため、嘱託研究員ダシュ・ショバ・ラニ氏を2009年2月14日～3月15日まで派遣した。ショバ氏は、同研究所所蔵の貝葉文献のうち1000点を調査、それらを言語・分野別に分類し、当該文献の点数や種類などの概要を把握し、その数量的な規模や学術上の重要度を明らかにした。また、インド学を専門とする山本和彦教授を2009年3月7日～3月15日までの間特別派遣し、確認作業にあたってもらった。

## 大谷大学DB研究

大谷大学所蔵貴重資料の  
デジタル映像化チーフ・教授 宮下 晴輝  
(仏教学)

## 研究目的

大谷大学の所蔵する貴重な学術的資産をデータベース化し、劇的にデジタル化の進む現代社会における活用を図ることは、いまや本学の重大な使命となっている。しかし、これまで個々の研究班や個人によってさまざまな資料のデータベース化が試みられているものの、全学的な視野をもったデータベースの構築はなされてきていない。本研究班では、大谷大学におけるデータベース構築の全学的な視野からの検討とその具体的な実施、および公開方法についての検討を行なう。

課題となるさまざまなデータベース構築に際しては、全学的な取り組みが必要と思われるので、本研究員、嘱託研究員はもちろん、さらには学内外の協力者を得て「大谷大学データベース構築に向けての研究会」を組織し、データベース構築についての課題を広く学内で共有するとともに、研究成果を発信してゆきたい。

## 全体的な研究計画

これまでの成果をふまえ、学内の諸機関（とくに図書館・博物館）、研究所の諸研究班と協力体制を組みながらデータベース構築を行うとともに、真宗関係文化財のデジタル化を進め、2011年の親鸞聖人750回御遠忌に合わせての公開を目指した取り組みを進める。なお、本学所蔵貴重資料のデジタル化・データベース化並びにその公開については、外部資金導入も視野に入れて推進する。

本研究班は、下記の項目にわたってのデータベース構築を目指している。

- 1 大谷大学所蔵北京版チベット大蔵経、チベット語蔵外文献、パリー語貝葉写本のデジタル画像データベース化
- 2 真宗関係文化財（音声テープ・写真など）の収集、デジタル化並びに公開
- 3 スタイン・バリオ収集敦煌出土文献などのマイクロフィッシュのデジタル化

- 4 教行信証、清沢満之自筆原稿など、すでにデジタル化されているデータの移管と公開に向けての検討
- 5 その他の資料

## 研究経過と今後の予定

2008年度は、1の北京版チベット大蔵経のデジタル画像データベース化に関して、外部資金の導入も視野に入れて推進し、作業の進め方についての調査、議論を進めた。他機関における貴重資料のデータベース化の実態を参考に、作業全般に関する枠組みを決定、さらに、作業に必要な予算の見積もりを行い、日本学術振興会科学研究費補助金の申請を行ったが、採択はならなかった。2009年度は、外部資金導入に向けたさらなる取り組みを行い、デジタル化作業の具体化をめざす。また、パリー貝葉写本のデジタル画像データベース化は2008年度に撮影作業を実際に開始しており、2009年度は撮影作業を継続する。

2に関しては、2008年度は真宗関係文化財の収集について関係各方面の協力を得つつ作業を進めた。2009年度は、現状では収集の進んでいない写真資料を中心に、引き続き収集、撮影作業を進める。

3に関しては、撮影作業の進め方に関する議論をもとに、2008年度中にマイクロフィルムスキャナの導入を行った。2009年度は、実際の撮影作業を開始する。

4に関しては、2008年度は、すでにデジタル化されているデータに関する確認作業を中心に進めた。2009年度は、この結果をもとに、新規ファイルサーバを導入し、データの移管作業を進める。

上記のようなデジタルデータベース化作業を推進するとともに、その公開方法についての検討をさらに進めてゆく。

## 真宗本廟（東本願寺）造営史研究

真宗本廟（東本願寺）造営史料の研究  
ならびに『本願を受け継ぐ人びと—真宗本廟（東本願寺）造営史—』の編纂チーフ・教授 木場 明志  
(国史学)

「真宗本廟（東本願寺）造営史研究」は、2011年の宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌の記念事業の一環として、

度重なる造営を支えた門徒を「本願を受け継ぐ人びと」と意味づけ、その懇念のあらわれである資材・労力・資金の提供と、大工・職人・工匠等の諸技術の結集によって美しくかつ壮大な伽藍を形作ってきた経緯を研究し、かつ一書にまとめようとするものである。なお、本プロジェクトは、本年度（2009年度）までの4年間を調査・研究期間とするものである。

東本願寺には、度重なる罹災をくぐりながらも、創建時以来の造営関係資料の残存が6000余点現存する。本研究では、上述の基本姿勢に基づき、造営の歴史を門徒の信仰を基軸に、伽藍建築意図・細部仕様意図・技術力・建築経過を史料から追い、もって真宗本廟の造営史を構成していく。信仰史・教団史はもとより、従来顧みられなかった建築史・技術史・美術工芸史、あるいは防災史まで、真宗本廟造営にみられる特質を抽出するとともに、禁裏造営・他社寺造営との比較などを通じて、他の一般研究分野にも寄与したい。最終目的は真宗門徒の帰依処である真宗本廟の意義の再確認である。

2008年度は、前年度に引き続き、両堂再建を中心とする真宗本廟造営に関する諸資料の精査・分類・翻刻、執筆用資料ファイルの作成を進めてきた。そのなかで、とくに実際の造営に至る経緯を把握するために、造営作事の組織や細部意匠決定のプロセス、門徒における用材寄進のシステムや造営をめぐる地域への説諭のシステム、および門徒側の心意と行動の詳細に研究方向を向けた。その一方で、東本願寺創立以前の本願寺の姿をも描くことを進め、寺院建築史における本願寺建築の位置を追求し、また内部障壁画の美術史的な位置を明確化することに努め、さらに資料篇を意識して史料翻刻の作業を急務とした。こうして年度末には報告書原稿が入り始め、ようやく全貌について展望できるところにたどり着いた。

以下では、昨年度の具体的な研究活動と経過について、研究推進計画として掲げるⅠ. 造営史の全体像の把握、Ⅱ. 資料調査、Ⅲ. 文書翻刻、Ⅳ. 国内資料調査、Ⅴ. 研究会、の各項目に基づきながら、順次に進捗状況を報告する。

Ⅰ. 全体像の把握では、本山機関紙によって明治度造営の進行過程を整理、その図表化から作事組織の実態と変遷、担当部署における事業内容の把握が行われている。また江戸期造営に関しては、東本願寺資料から関連諸資料の抽出・写真撮影、および再建時ごとの分類・整理がほぼ終了し、漸次分析を進めている。

Ⅱ. 資料調査については、本学図書館および博物館所蔵の関連諸資料の抽出・写真撮影がおこなわれた。そ

の内、図面類に関しては、本年度に実施する予定である。合わせて、「総国御会所略図」（天保7年）など必要史料の購入、明暦度「御堂建立記」などの借用調査、複写物の取り寄せを順次おこなった。

Ⅲ. 史料翻刻については、造営・焼失・再建の全般的な動向と、その具体的な様子を把握するために、東本願寺資料をはじめ、他機関所蔵の関係資料の全文翻刻または関連記事の抄出翻刻が順次に進められている。以下、翻刻を完了した諸資料の一部について、所蔵機関別に列挙すれば、次の通りである。

【東本願寺所蔵】

『寛文元年御影堂遷座記録写本』『粟津元隅日記寛文六年阿弥陀堂再建一件抜書』『御材木御拝領並日ノ丸御船印御納借且門下ニ付浦触等御願立一件書抜』

『小屋組・足代・御柱建・御畳・御棟上記録』『公儀掟書・裁許書・仰渡留書写』

【大谷大学図書館所蔵】

『東本願寺再建被掛候御届一件』『御堂日記（略抜）』『御影堂棟上記』『文政四巳年東本願寺御直命十二ヶ条』

【大谷大学博物館所蔵】

『大谷御廟地於江府御願書之覚』『徳川家康公消息』『徳川秀忠公消息』『徳川家光公消息』『徳川家綱公消息』『徳川家吉宗消息』『徳川忠長公消息』

【城端別院所蔵】

『御再建見聞私記』

【新井別院所蔵】

『歓喜光院御影下付書立写』『東本願寺焼失に付懇志依頼状』『新井別院焼失に付書簡』『東本願寺再建取持六箇条』『毛綱御再建志納帳』

【新潟木揚場所蔵】

『百事日誌』（第4～6）

【尾上嶽殉難遺族杉田家所蔵】

『殉難見舞金下付状』（仮称）

この他にも、国立公文書館に所蔵される関連諸資料などの翻刻が終了している。

Ⅳ. 国内資料調査では、2008年8月7日に松井建設所蔵の両堂・諸殿造営資料の調査、翌8日には、国立公文書館所蔵および伊藤平左衛門家所蔵の関係資料調査を実施した。また11月25日に、福井市立郷土博物館所蔵の小林小太郎旧蔵資料・高木相良家資料の調査、翌26日には、直井光男氏所蔵・収集資料の調査をおこなった。こうした国内資料調査は、東本願寺資料を客観的に裏付けるための調査であるとともに、地域に残る関連諸資料の発掘を通じて、「本願を受け継ぐ人びと」の諸相と造営史全容のさらなる理解に努めている。



V. 研究会については、公開研究会と個別課題の報告会を定期的実施してきた。公開研究会は、嘱託研究員の報告を中心に4回開催したが、多数の貴重なご意見を頂戴することができた。

第9回目：加藤享子氏（講題「富山県刀利村からの献木」）

第10回目：東館紹見氏（講題「廟堂（御影堂）の創建と大谷本願寺」）

：山岸常人氏（講題「文政度造営の建築的な問題」）

第11回目：櫻井敏雄氏（講題「御坊格寺院本堂の建築構成と工匠—その平面と空間・意匠—」）

伊藤延男氏：（講題「本願寺寺内、境内の位置と大きさの変遷—吉崎から京都まで—」）

また個別課題の報告会では、再建造営をめぐる諸問題が、順次に取り上げられると共に、刊行物の全体構成・章立て・目次内容についての調整・検討が行われた。

最後に、本年度の研究計画を示せば次の通りである。主たる作業は報告書原稿の整理と全体の調整であり、門徒の信仰を基軸とした真宗本願造営の歴史を、建築・技術・美術・工芸・防災といった特質をふまえて編集に意を尽くしていきたい。また、実際には関連諸資料の補足調査、翻刻史料の確認作業が最後まで継続されよう。余すところの月日を有効に使って、報告書『本願を受け継ぐ人びと—真宗本願（東本願寺）造営史—』編纂作業の完成を鋭意に進め、真宗門徒の帰依処としての存在意義を確認していく。

## 2008(平成20)年度「一般研究」研究結果概要

### 共同研究

### 本願所寺院組織の確立と 信仰文化の形成・伝播に関する 歴史民俗学的研究

研究代表者・名誉教授 豊島 修  
(日本近世庶民生活文化史・日本宗教民俗学)

#### 【研究概要】

本研究が対象とする「本願」・「本願所」とは、主に寺社の堂社修復の役を担い、その修復料としての米銭の喜捨をもとめて諸国を廻国・勧進し、当該寺社の縁起や靈験を唱導した宗教者、またはこうした宗教者を統括する組織である。「本願」は寺社の堂社修復等の成就という結果のみならず、その過程において信仰文化を各地へ伝播・定着させることとなった。その典型的で大規模な事例は、紀州熊野三山の「本願所」の事例である(『熊野本願所史料』)。

「本願」は、史料的に16世紀初め頃より全国の寺社に出現し活躍したことが知られる一方、17世紀になると道家や寺家との争論が頻発し、職掌や役割が制限されたり、追放されたりした。本研究では、まず「本願」の歴史的事態を究明すること、特定の寺社史における組織的解明にとどまらず、中世後期～近世の歴史学的諸問題の検討にも寄与できる研究成果を目指して活動を行った。

本研究は2年間の継続研究として採択され、現時点も研究目的に則した活動をおこない、以上に述べた「本願」・「本願所」をめぐる諸問題についてその解明に取り組んだものである。

2008年度の活動は、2007年度の研究計画や内容を継続し、「本願」の所在と史料の検討、そして歴史的・民俗的意義などをまとめた報告書の作成を念頭に置きながら、研究を進めた。

ところが、「本願」の諸相は実に多様であった。寺社の一山組織による構造的な問題、地域性、時代性、系譜(法脈)、職掌など、「本願」・「本願所」の事例は、決して史料的に一律ではない。つまり「本願」の呼称とその機能などについて、熊野「本願」・「本願所」の事例との異同だけでなく、さらに複雑多岐で難解な課題

を新たに見出すことになった。このことは、本研究を通して多角的に検証して得られた成果の一つである。

残念ながら年限内でこの問題を消化できなかったが、本研究班が主催する公開研究会などの場において議論を積み重ねて様々な知見を得られた意味は大きい。

本研究課題は、歴史学・民俗学などの研究領域に寄与できる重要な論点をいくつも含んでいる。その意味で、早く研究の成果は広く学界に問わねばならない。そこで本年度で満了し、3月に「本願」の歴史的・民俗的意義、さらに新たに見出された課題などをまとめた報告書を作成した。以下、その内容の一端を紹介し研究成果報告に代えたい。

まず巻頭の「総論」では、「寺社造営「本願」研究の現状と課題」と題して、「本願」の研究史と「本願」の概念規定、および「本願」研究をめぐる論点について詳細に整理した。

第一部には、「本願」の立体的な様相について、論文六本にて構成した。それは紀伊熊野三山、近江国多賀大社、山城国清水寺、出雲国杵築大社、尾張国津島神社、山城国祇園社などの事例を取り上げた論考である。これらの事例研究を通して、寺院・神社の政治的・宗教的・組織的差異がある中で、「本願」の活動として、質的に共通する部分と異質な部分が明確にされ、また地域的特徴も見出された。さらに従来、「本願」の組織・役割・活動などの実態が明らかになっている熊野三山の「本願」との比較分析が進展したのみならず、熊野三山の「本願」の普遍性についても研究史的に再検討しえる内容である。

第二部は、「本願」と勧進をめぐる組織化・宗教文化史的な様相として、箱根・伊豆山権現と三島社における本願(勧進)組織のあり方、近世木食遊行「聖」の実践、山城国本願寺の造営・再建における勧縁募財システム、熊野本願と諸国に散在する熊野比丘尼、本願と修験道という内容である。第一部が個別の寺社に焦点をあて、各々の組織的環境下における「本願」の史料的分析をおこなったのに対し、第二部は、それら各地の「本願」を横断的に分析・検討し、「本願」の性格やその役割が宗教文化史的に、どのように位置づけられるかという視点をもつ論考で構成されている。

第三部は、諸国の寺社の「本願」・「穀屋」をテーマとした。すでに第一部で諸国の「本願」を取りあげたが、そのほかにも全国的に「本願」の事例がみられる。また「本願」を名乗らず、「穀屋」とほぼ同様な性格を有する寺社も多数確認することができる。本報告書で

は、可能な限りの寺社を取りあげ、今後の調査・研究に資するために構成した。取りあげた寺社は、北から虚空蔵堂圓蔵寺、善光寺、高野山金剛峯寺、紀三井寺、粉河寺、清涼寺、伏見稻荷大社、上醍醐寺、松尾大社、東寺、叡福寺、長谷寺、金峯山寺、信貴山朝護孫子寺、東大寺、巖島神社、金剛福寺、宇佐神宮などである。いずれも諸国の「本願」について史料的な典拠をただしながら、「本願」の成立と展開、あるいは中世後期から戦国期に、寺社組織内に「本願」が定着していく過程はもとより、その時間的差異・領主権力の庇護の問題、そして社家・寺家との争論やその顛末について比較分析が可能となり、「本願」という人物、組織、機能、役割などが、何故この時代に希求されたのか、それは寺院間社会において運動性があるのか否かといった、多面的な分析視角が得られる。

以上の三部構成からなる本報告書は、日本中近世における政治史や宗教史(寺院史)に寄与するばかりでなく、歴史民俗学、宗教民俗学などの隣接学問分野との学問的關係を想定される内容であると理解している。

## 共同研究

# 東南アジア大陸部における 生成的コミュニティ

研究代表者・元本学教授・非常勤講師 田辺 繁治  
(社会人類学)

本研究の目的は、生と生存のニーズに基盤を置く新たなタイプのコミュニティにおける共同性と社会性の実態を記述し、そうしたコミュニティが人々の欲望、想像力や潜勢力によって生成変化していく局面を明らかにすることである。まずは実態を把握するために行った前年度の調査をうけて、2008年度は特に人々の欲望やニーズを実現させる過程で生じる問題、それらをめぐり国際・行政機関、NGOなどの介入・連携、そしてそこに発生する対立や交渉といった局面に注目して調査を実施した。また、タイのチェンマイ大学において海外研究協力者とともにワークショップを開催し、各人の調査データを比較検討し、研究課題の中心的概念である「生成変化 (becoming)」について議論した。以下にそれぞれの概要を示す。

## 1. 調査

田辺繁治は、ラオス・ファイサイ市で活動を展開する援助組織Norwegian Church Aid (NCA) を訪問し、感染者グループの組織化の概況を把握すると同時に、タイ・バンコクの保健省とACCESS財団において抗レトロウイルス薬治療に関する資料収集を行った。松田素二は、タイ・チェンマイ県チェンダオ郡、チェンコン郡、チェンマイ市において、コミュニティ・フォレスト運動の導入過程と困難に焦点をあてた実態調査を実施し、西ケニアにおけるマラゴリ人コミュニティの森林保護運動との比較をとおして、人々のニーズと外部からもたらされる西欧的森林保護言説との関係について検討した。高井康弘は、タイ・ウドンターニー県、ノンカイ県およびラオス・ビエンチャン市のベトナム系住民居住地区において、彼らの経済生活や社会関係について時間的経過に伴う変化に注目して聞き取り調査を行った。阿部利洋は、カンボジア・プノンペン市のクメール・ルージュ特別法廷裁判部およびカンボジア資料センターで特別法廷の審理展開に関する資料収集を行うと同時に、社会開発センターの公開フォーラム「正義と国民和解」に参加した。古谷伸子は、タイ・チェンマイ県において、Northnet財団が支援する民間治療師グループのメンバーからグループへの参加動機・目的について聞き取り調査を行った。藤田直子は、タイ・アユタヤ県バンブイン郡において、工場労働者への聞き取り調査を実施するとともに、郡庁と県庁において労働者の実態に関する行政資料を収集した。

## 2. ワークショップ

2008年8月16～17日の2日間にわたり、チェンマイ大学社会科学部社会学人類学科において「東南アジア大陸部における生成的コミュニティ (Communities of Becoming in Mainland South East Asia)」と題するワークショップを開催し、以下の研究発表がなされた。

- ・松田素二 (京都大学大学院) 'Forest Conservation Discourse as the Weapon of the Strong with a Special Reference to Maragoli Forest Communities in Western Kenya'
- ・Surasom Krisnachuta (Ubon Ratchatani University) 'Deterritorializing Peasant Communities: Land Struggles and Rural Restructuring in Isan'
- ・Duangjai Lortanavanit (Thammasat University) '"Communities of Becoming" in Tourist Space in Pai, Mae Hong Sorn, Northern Thailand'
- ・藤田直子 (大谷大学) 'Urban Communities of Migrant Laborers from Northeast Thailand'

- ・高井康弘(大谷大学) 'Becoming a Vietnamese-Thai and Living in a Local City: A Case of Nong Khai, Thailand'
- ・Malee Sithkriengkrai (Chiang Mai University) 'From Body to Ritual-body: A Becoming Mor Yao Community'
- ・Kwanchewan Buadaeng (Chiang Mai University) 'Khuba Communities in Li District, Lamphun Province'
- ・田辺繁治(大谷大学) 'HIV Self-Help Groups of Northern Thailand in Transition'
- ・Apinya Fuengfusakul (Chiang Mai University) 'Santi-Asoke: A Theravada Outcast Movement of Thailand'
- ・阿部利洋(大谷大学) 'Cambodian Returnees and Social Movements on Khmer Rouge Tribunal'

## 共同研究

# 聴覚障害者への地域生活支援 のためのプログラム研究

研究代表者・准教授 志藤 修史  
(社会福祉学)

本研究は2007年～2008年にわたる2年間の継続研究であるが、今回の報告は2年目の研究についてのみの総合的な内容とする。

さて、2007年度には、京都市内でくらす聴覚障害児・者とその家族の生活実態と、対策の現状を明らかにするため調査に取り組んだ。その基本的な集計結果についてはA4、180頁の『聴覚言語障害児・者とその家族の生活実態調査事業』報告書として、2007年3月に発行している。また、京都新聞での報道にもあったように、2007年3月8日にはスタッフ合わせ、およそ150名の参加のもと、本学講堂において調査結果報告のためのシンポジウムも開催したところである。

2年目である2008年度は、これらの成果の上に立ち、第一に、調査結果についての詳細な分析を引き続き行い、関係団体や機関との協議をすすめて、具体的な対策のための何らかのプログラムを提案・実施する。第二に、調査で明らかになった、わが国重複重度障害問題への対策の貧困状態に対し、何らかの展開を切り開く上で、先進的実践に取り組んでいる国を訪ね、そこでの実態を分析検討する。という大きくは二つの点を中心に研究を進めた。

第一の点については、4月18日(金)、4月30日(水)、6月

13日(金)、6月20日(金)、7月25日(金)の計5回、京都聴覚言語障害者福祉協会の事務局職員との検討会の実施。さらに、5月18日には、NPO法人京都市中途失聴・難聴者協会総会において、調査の報告並びに今後の方向についての検討。7月27日には、京都市聴覚言語障害者の「豊かなくらしを考える集会」において、調査の報告並びに今後の具体的な対策についての検討。8月2日には、京都難聴児親の会において、調査の結果報告並びに今後の具体的な対策についての検討をそれぞれ行った。いずれも100名を超す参加者との協議であったため、十分な時間をかけての検討に至らなかったが、意見交換そのものは活発であった。

これらの報告検討会には、京都聴覚言語障害者福祉協会の事務局職員並びに柴田浩史共同研究者とともに出向き、検討結果についての具体的な対応について協議を重ね、9月20日の京都聴覚言語障害者福祉協会職員研修の場で報告を行った。

一方、障害者福祉研究の理論的課題である、地域生活問題と障害者問題との関係性の論証については、調査結果の分析を、6月14日開催の日本地域福祉学会にて報告するとともに、2008年11月付総合社会福祉研究所発行「総合社会福祉研究No.33」にて発表した。

さて、第二の点に関しては、8月30日～9月13日のプログラムで、スウェーデンとフィンランドの二カ国を訪ねた。主には、ろう盲者のサービス実態を内容や質、その前提条件など含めトータルに把握することが目的であった。なお、フィンランドでは、山田真知子浅井学園大学教授の協力により、聴覚障害に限らず、福祉サービス全体の状況への知見を得ることができた。なお、訪問した機関は、フィンランドろう盲協会、フィンランドろうあ連盟、聴覚障害者サービスセンター、さらに、国際ろうあ連盟であった。国際ろうあ連盟を除けば、いずれも巨大なサービス実施機関であり、また、サービス提供に関わるあらゆる場面でのオンブズマンでもあった。また、国際ろうあ連盟は地球規模での障害者運動をリードし、国連の障害者権利条約において、手話を言語とするよう働きかけ、実施させてきた機関でもある。このような、社会的なムーブメントを引き起こすエネルギーと、その実行をすすめるパワーの源泉が北欧全体での社会運動とその一環として明確な発言力を持つ当事者組織であった。なお、国際ろうあ連盟並びに各機関、山田教授への紹介は、共同研究者の柴田氏によるものである。

これら今年度の研究成果に関する共同研究者を含めた最終報告を2009年3月9日に実施し、今後の具体的なサービスプログラムについての意見交換などを行った。

## 共同研究

近世仏教文化文献の  
基礎的研究研究代表者・名誉教授 石橋 義秀  
(国文学)

近世仏教文化文献の中でも、略縁起や勸化本などの研究は、近年、急速に進められ、その成果は数多く公開されている。しかしながら、近世仏教文化文献には未調査の資料が山積しており、その文献データベースの整備が重要であると考え、『研究所報No.52』(2008.5)記載の研究目的に基づき、研究員・協同研究員9名が上記の研究テーマに取り組み、年度末に『近世仏教文化文献の基礎的研究』と題する本共同研究の中間報告書を出版した。その内容については、後述するが、以下、本共同研究をいかに遂行してきたか、その経緯と成果について、概要を記す。

## I 運営会議 [共同研究を進めるための研究員・協同研究員の準備・検討会議]

- ①4月8日(火) ②5月12日(月) ③6月4日(水)  
④7月2日(水) ⑤9月19日(金)

## II 研究会 [本共同研究の研究員・協同研究員の具体的な調査報告・研究発表]

- ①6月23日(月)報告 石橋義秀・近世の往生伝  
報告 菊池政和・大正大学所蔵本  
調査報告  
報告 義田孝裕・大谷大学図書館  
蔵金毘羅利生記  
②7月28日(月)報告 大秦一浩・手爾葉大概抄  
報告 本井牧子・十王経関連の談  
義本  
報告 末松憲子・親鸞聖人御旧跡  
納帳  
③9月26日(金)報告 佐藤愛弓・大谷大学所蔵本の  
伝来

## III 公開講演会

- ①5月12日(月) 講師・本井牧子「文献選定と研究  
計画の推進」  
②10月31日(金) 講師・和田恭幸「近世略縁起の版本」

## IV 大谷大学所蔵資料調査の経緯

本共同研究の基礎作業として、大谷大学所蔵の、

主として近世仏教文化文献の資料調査を研究員・協同研究員9人が手分けして行なった。

その調査は、研究員・協同研究員9人が大谷大学所蔵資料の閲覧希望を月ごとにまとめて図書館に申請する形で実施された。調査期間は、2008年6月～2009年1月まで、約8カ月におよび、調査日数は延べ38日となった。また総調査資料数は延べ320点に及んだ。大谷大学図書館の格別のご配慮に感謝申し上げたい。

## V 大谷大学所蔵資料調査の成果

上記 [IV 大谷大学所蔵資料調査の経緯] に記したように、研究員・協同研究員9人が調査した成果を『近世仏教文化文献の基礎的研究』にまとめ、2009年3月に出版した [B5版65ページ]。その内容について、簡略に報告する。

本書は、大谷大学所蔵資料の中でも、特に注目すべき近世仏教文化文献の調査報告書である。前半・解題部と後半・目録部二部から成る。

①前半・解題部は、研究員・協同研究員9人が分担執筆した。重要と考えられる文献 [以下の30] の詳細な解題を収録する。

親鸞聖人御旧跡略縁起／高田山一光三尊靈験記／女人往生伝／親鸞聖人御旧跡図／御札はり込帖／旧跡巡拝帳／親鸞聖人御旧跡納帳／地藏十王経講義／十王経実蔵弁／儼避羅抄／釈門三十六人歌合／十王経勧考／永平高祖行跡図略伝／浄土勸化三国往生伝／因縁集／説法因縁追捨考記／毘沙門天靈験記／三河国八橋略縁起／仏種頂戴記／靈仏靈社参詣／日蓮宗諸寺集印帖／六道物語／安達原黒塚物語／伊勢物語大成／ゑ入 伊勢物語／手爾葉大概抄・手爾葉大概抄之抄／古今和歌相伝灌頂次第 下／太平記理尽図経／金毘羅利生記／蓮生法師行脚日記 玉廻露／ [以上 解題部、43ページ]

②後半・目録部は、佐藤愛弓が研究員・協同研究員9人の調書をもとに編集したものである。本目録には、総調査資料320点のうち、重要と考えられる約6割の資料182点の、それぞれの資料についての、大谷大学図書館請求記号・書名・数量・刊写の別・装丁・法量・匡郭・版心・刊記・奥書・識語などの他、備考欄に内容注記・認定書名・認定年代・題セン・書き入れ・訓点などが記されている。採録したデータの抜粋ではあるが、資料の性格を知るうえで、有効といえよう。[以上 目録部、19ページ]

時間の制約もあり、前半・解題部、後半・目録部ともに、決して十分な内容とはいえないが、2008年度1年間の研究成果をなんとか公刊することができた。今後は、研究員・協同研究員9人がさらに『近世仏教文化文献の基礎的研究』を充実させ、学会に寄与できるようそれぞれ研究を進めたいと念願している。

## 共同研究

# 石刻史料からみた宋元時代 華北地方における仏教の 社会史的変遷に関する基礎研究

研究代表者・教授 桂華 淳祥  
(東洋史学)

本研究は、宋元時代の華北地方における仏教と社会との関わりの歴史的変遷について、複数の研究者の参加を得て、中国史の視点に加え、当時華北を領有していた遼・金・元といった異民族の支配体制や、朝鮮半島および日本との交渉など周辺の諸民族あるいは地域との関係という視点から、仏教関係石刻史料の蒐集と整理を中心として問題分析を行って当該研究の基礎データを充実させることを第一の目的とする。

具体的な活動としては、まず既存および最近刊行された石刻史料集に収録される当該時代の河北・河南・山東・山西各地域の仏教関係石刻史料の検索を進めつつ、研究班員を中心として会読を行い、上記作業で得られた碑刻について、その内容を検討して重要と思われる記事を抽出している。

会読は月に1回のペースで行い、「故聖宗皇帝淑儀贈寂善大師墓誌銘」遼・清寧9年(1063)、「大遼燕京西大安山延福寺蓮花峪更改通円通理旧庵為観音堂記并諸師実行録」遼・天慶5年(1115)、「浄栄塔銘」元・中統4年(1263)、「大明院仏殿記」元・至元14年(1277)、「故釈源開山宗主贈司空護法大師龍川大和尚遺囑記」元・大徳11年(1307)、「大元朔州林街崇福寺量公禪師施財遺跡記」至正14年(1354)などについて検討した。このような史料の解説によって仏教活動に関する既知の史料の確認が出来たほか、遼から元に至る華北の各地域社会における活動の実態、例えば、寺院の創建・修築に係わる経済活動はもとより上院・下院といった寺院組織、

そして特に新出の史料によって僧の師弟関係に代表される人的な繋がり、あるいは彼等によって継承される教義的な繋がりを示す記事なども見出せた。

一方、今一つの活動である現地調査については、2008年11月7日から12日にかけて、中国河南省にて実施し、宝豊では香山寺、汝州では風穴寺の上下塔林、登封では永泰寺・少林寺などで現状の調査を行った。特に少林寺では、本研究の準備段階で、『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』などの既存の史料集に掲載される拓影や京都大学人文科学研究所蔵の拓本を基本史料として会読を行ってきた、金代の「少林禪寺西堂老師和尚塔銘」正隆2年(1157)、「前任持嵩山少林寺端禪師塔銘」大定8年(1168)、元代の「少林寺乳峰仁公禪師塔誌銘」至元5年(1268)、「普恵大師道公庵主塔銘」大徳3年(1299)、「宣授少林住持達公禪師塔銘」大徳11年(1307)、「宣授少林提舉興福普照藏雲大師山公庵主塔銘」至大元年(1308)、「大元贈大司空開府儀同三司追封晋国公少林開山光宗正法大禪師裕公之碑」延祐元年(1314)、「少林寺請疏碑」、「少林寺第十代妙巖弘法大禪師古巖就公和尚道行碑銘」、「嵩山少林寺和公山主塔銘」〔以上3碑、延祐5年(1318)〕、「正宗弘法大師大名僧録少林功行之碑」至治2年(1322)、「顯教円通大禪師照公和尚塔銘」後至元5年(1339)、「少林寺第十五代住持息庵禪師行実之碑」至正元年(1341)、「少林寺第十一代住持鳳林珪公禪師行状之碑」至正9年(1349)、そして明代の「少林寺住持淳拙禪師公塔銘」洪武25年(1392)などについてその存否を含め現状を把握し、加えて既存の文献には載録されていない碑刻も確認できた。その結果、実見できた碑刻のなかには、拓本や拓影では読みとれない文字を補うことのできた例も少なくなく、これによって石刻史料を実見することの重要性をあらためて認識することとなった。また上記「顯教円通大禪師照公和尚塔銘」「少林寺第十五代住持息庵禪師行実之碑」は日本の僧邵元の撰であり、後者には山東の靈巖寺にも撰者と篆額者そして立石年を同じくする「靈巖禪寺第三十九代息庵讓公禪師道行之碑」(桂華編『金元代石刻史料集—靈巖寺碑刻一』『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』23参照)がある。夙に常盤大定・塚本善隆らによって詳しく紹介されているが、当時の中国における日本僧の活動を示す碑刻として興味深い。

このように準備段階を含めた現在までの活動は石刻史料を中心にした史料の蒐集であるが、それによって従来の研究では史料が乏しいことから空白の時代として扱われてきた当該時期華北仏教界の動きを跡付けるための基礎データを得つつある。

幸いに本研究は平成22年度までの予定で日本学術振興

会より科学研究費補助金が交付されることとなったので、上述のような方法にて史料の蒐集を続行し、さらに最新の情報も含めて検討を進め、華北全域さらには周辺地域にまで及ぶ詳細な情報の把握に努めたい。

## 共同研究

# 資史料空間から任意の関心領域を柔軟に抽出・提示する 新たな方法論の研究

研究代表者・准教授 柴田 みゆき  
(情報処理学)

本研究はコンピュータを用いて、複雑な系譜を系図上に入力・表示・編集する効率的な方法を検討するものである。

人文科学領域では一次史料または可能な限りそれに近いものを扱うことが求められる。諸分野においてコンピュータ化がすすんだ現在、人文科学領域においても、内容の簡便な整理・検討のためにテキストの電子化や、データベース化する手法が用いられる。ところが、系譜・系図史料は個々の関係性を示す線分情報を有するため、コンピュータ上での表示の方法が単純ではない。本来、系図の表記ルールは、系譜情報の直感的理解を助けるために効率的に、かつ単純に図示化されるためのものである。しかし、コンピュータ上でのルールは、系図を記録する媒体の物理的制約に依存するため、適用が難しい。そこで、コンピュータを利用して適切な系図を提示するために、これらの制約とその問題の所在を整理することとした。

本研究ではまず、研究対象を日本の系譜・系図史料とした。これは、系譜・系図の基礎データは当然に個人情報との集合となるため、現実社会に与えるいかなる影響をも最小限に抑える必要を考慮したためである。加えて、古代の系譜・系図資料は様式が多岐にわたる。そのうえで調査する系譜・系図媒体として、紙媒体と既存の系図ソフトウェアを利用した電子媒体を調査した。その結果、両媒体ともに同族婚や複数家系の表示に大きな問題があることが判明した。従来の紙媒体による表示では、紙面の大きさという制約を回避するために、1つの個性を1箇所配置したり、それらの個性を複雑に線分を交叉させながら結んだりすることで一覽性

を保持してきた。情報量が多いとき、一定面積で一覽性を優先させると視認性が悪化するとともに、情報を表示する物理的空間にも限界を生じる。つまり、紙媒体の利用は、一覽性を優先するか全データ表示を優先するかの、どちらかを取捨選択することとなる。

これに対し、既存の系図表示ソフトウェアでは、プログラミングの困難さから同一個性を2箇所以上に配置することで線分交叉を回避している。このため、関係性の直感的把握を困難にしている場合がある。しかし、我々はコンピュータでは全データの詳細な表示と全体像の俯瞰的な一覽性の同時確保が可能であることを、以前の研究で明らかにした。従って、コンピュータ上で紙媒体のような直観的な線分交叉表示を実現できれば、人文系研究者が従来利用してきた紙媒体の系図表示に近づけることができ、さらにコンピュータを利用する利点を享受することができると思う。

系図上で線分交叉が発生する主要な原因のひとつは婚姻関係の構築である。しかし、婚姻関係は時代や文化により様々な態様をみせる。しかも、視認性の良い系図表示を実現するには、簡素な図形表現が求められる。また、処理が重くならないようにするため、単純なアルゴリズムが必要である。そこで本研究では2つの個性間に生じる婚姻関係を図像化する規則を7項目に整理した。そのなかでも2つの兄弟姉妹関係において生じる婚姻関係に特化して、図形の分類と最適化可能な交叉回数を求めた。この結果、同条件においては最大で8種類の図形表記が想定され、そのそれぞれにおいて交叉が発生する場合に、その最適交叉回数は1回であることが明らかとなった。

ところで、系図ソフトウェアで線分交叉を実現するためには、プログラムだけでなくデータベース構造も考慮する必要がある。既存の系図表示ソフトウェアでは、追加・変更される個性の属性とそれに付随して変化する関係性がデータベースに記録・管理される。しかし、紙媒体と同様の線分交叉を実現するには、既存の系図表示ソフトのデータベース設計では、十分に対応できない。しかも、系図の線分交叉の配置パターンは複数存在する。そこで、それらの配置をユーザーが選択可能なデータベース設計の基礎的な検討を行った。

この研究成果を、2009年3月に開催された情報処理学会全国大会において発表すると同時に、研究成果報告書『(I) 関心領域の柔軟な抽出・提示手法に関する検討』、『(II) テキスト検索と系図表示に関する人文科学領域からの検討』、『(III) 系図表示のためのソフトウェア開発と線分交叉手法の定式化』、として3分冊形式にて発行した。

当初の計画では、以上の研究成果をふまえた上でプログラムの実装およびデータベース設計の再構築を行う予定であったが、現時点ではそこまで到達していない。系図において発生しうる線分交叉の全条件を特定するまでに至らなかったこともその原因の一つであるが、そのための基礎条件の特定は本研究で明らかとなった。本研究の成果を基礎として、他条件に基づく線分交叉およびそれを実現するデータベースの再設計についてさらなる研究が進行中である。最終的なプログラム実装に向けて、今後も研究を鋭意すすめる予定である。

## 個人研究

# 精神主義の受容と展開 —真人社と同朋会運動

代表研究者・教授 水鳥 見一  
(真宗学)

清沢満之は、明治期に出現した仏教思想家である。一宗一派にとどまる思想家ではなかった。彼の唱えた精神主義は、近代的理性の批判に应答し得る親鸞思想であった。つまり、近代人の実存的要求に対して、「自己とは何ぞや」という命題をもって応えたのが清沢であり、その清沢の思想に、近代人は頷ぐのである。すなわち清沢出現の歴史的意義は、親鸞思想の生命力を、近代社会に回復したところにあり、そのような清沢の営みが近代教学を形成した。清沢の親鸞思想の実存的了解は、近代人に宗教的黎明をもたらしたと言っ

よい。近代教学は、清沢の没後、さまざまな信仰共同体によって受容、展開された。具体的には、「浩々洞」→「佐々木月樵時代の 大谷大学」→（曾我・金子異安心問題）→「興法学園」→「真人社」→「同朋会」という歩みであり、したがって、本研究はこの共同体の継承を検証することとところに基盤を置くものであった。

信仰共同体の継承を、我々の先学の仏道において確認すれば、清沢の「自己とは何ぞや」という命題は、曾我によって「法藏菩薩誕生」として継承され、また高光大船においては、自らの「生活実験の告白」において具現化された。そして彼らの教化を受容したのが、安田理深、訓覇信雄、松原祐善、さらに仲野良俊、柘植

闍英、高原覚正らであった。さらに、彼らは戦後混乱期に「真人社」を創設し、真宗仏教を掲げて戦後の復興を宣言したが、それは思想混迷に沈む国民の要求に応えるものであったのである。バクネル大学のクックをして、「二十世紀における宗教改革」と言わしめた所以である。そして1962年、高度経済成長期を背景に、訓覇は、清沢の「自己とは何ぞや」に应答するために、「個の自覚」を掲げて同朋会運動を始めたのである。

実に、清沢の「自己とは何ぞや」を起源とする同朋会運動は、どこまでも信仰運動でなければならない。つまり、単なる教団改革のための運動ではなく、真宗仏教において大切に伝えられる信獲得の運動であり、したがって、清沢の次のような理念に基づく運動であったことを、我々は承知しなければならない。

吾人は彼の光明の指導に依信するの安泰を得つゝあり吾人は吾人のみならず一切衆生が吾人と同く彼の光明の攝取中にあることを信するなり、故に吾人は一切衆生と共に彼の光明中の同朋なることを信するなり、吾人は同朋間の同情を大要義と信するなり、(『他力信心の発得』『清沢満之全集』(岩波)六卷)

そして、その理念は訓覇によって、次のように言い表されている。

個を超えて個を包むもの、それを如何に聞くかということ、現代社会の当面している大きな課題であります、それは宗教的生命の実現、すなわち本願を共に生きる共同体の実現以外にはありません。言いかえればこのことは、僧伽の実現であり、これこそ現代人の課題であり深い願いなのであります。

我々一人ひとりが、「光明中の同朋」の中の実存であることの発見、つまり「本願を共に生きる共同体」を実現する自己であることの確認が、本研究の中心テーマであったのである。

本研究の方法としては、基本的に資料の蒐集と読み込みであった。資料には、我々の先学の著書や講演録等と言うまでもないが、その他、教団から刊行された『真宗』等の機関誌や『無尽灯』『大谷大学新聞』や『中外日報』などである。さらには、多くの個人雑誌も資料とした。たとえば、曾我量深の『見真』、金子大榮の『仏座』、高光大船の『直道』、興法学園からの『興法』、真人社からの『真人』、開神舎からの『開神』などで、これらの中には、これまでほとんど注目されてこなかったものも多くあった。



# 海外学会参加報告

## 第6回国連ウェーサクの日・国際仏教徒会議 電子化推進ワークショップ参加報告

西藏文献研究 研究員・講師 三宅 伸一郎

2009年5月4日(月)から6日(木)までタイで開催された第6回国連ウェーサクの日・国際仏教徒会議 (International Buddhist Conference on the United Nations Day of Vesak Celebration) の会期中の5月5日に開催された電子化推進ワークショップ (Electronic Initiatives Workshop) に参加するため、5月4日(月)から7日(金)の日程でタイ国に出張したので、簡単にその報告をおこないたい。

ワークショップは、その他の第6回国連ウェーサクの日・国際仏教徒会議の他の分科会/ワークショップと同様、アユタヤ県ワンノイ郡にあるマハチュラロンコーン仏教大学本校キャンパスを会場としておこなわれた。

Lewis Lancaster教授 (UC Berkeley)、Phil Stanley教授 (Naropa Univ.) の司会のもと、30余名の参加者全員がそれぞれ、簡単に自己紹介をおこなった後、主に、総合的なオンライン仏典目録構築に向けての議論がなされた。その結果、統一された形式の仏典オンライン目録 (Unify Catalogue of Buddhist Texts) の作成に向け、来年までに情報の集約と今回参加した各機関・個人のデータの共有化をはかり、目録のプロトタイプを作成し、最終的な完成に向けての計画を立案するとの決定がなされた。

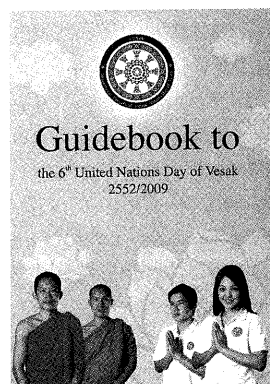
午後には、参加者を扱う言語別に、サンスクリット、パリー、チベット・モンゴル、漢語のグループに分け、グループごとにディスカッションする時間が設けられた。報告者は、Phil Stanley教授、Bruno Laine (Tibetan Manuscripts Project, Vienna Univ.)、Steven Weinberger (Tibetan and Himalayan Library, Univ. of Virginia)、Burkhard Quessel (British Library)、Jeff Wallman (Tibetan Buddhist Resource Center)、Tsymzhit Vanchikova (Digital Resources of Canonical Collections of Buryatia, Academy of Science and Buddhist Studies) の各氏とともにDavid Germano教授 (Univ. of Virginia) が統括するチベット・モンゴルのグループに参加した。このグループでは、各参加者が、どのようなデータを構築しているのかの情報を提供し合いながら、将来作成されるであろう総合的なオンライン仏典目録に、どのようなデータが入れられるべきであるかをブレインストーミング形式で意

見を出し合った。その中では、敦煌出土文献中には存在しながら、後世に成立した大蔵経 (カンギュル・テンギュル) に収められていないテキストや、目録 (dkar chag) にその題名が記載されているものの、大蔵経には存在しないもの、あるいは、ニンマ派の伝える古タントラやボン教の大蔵経に収められているテキストについてもそのデータを入れるべきではないかとの意見が出された。さらに、個別各テキストに対して、入力データ、画像データ、翻訳、注釈の有無、翻訳者名の異同についての情報を加えるべきだとの意見が出された。また、データの共有化を計るため、技術面での情報交換が必要ということも話し合われた。

ワークショップ全体の結果は翌日6日、バンコクの国連会議場で開催された第6回国連ウェーサクの日・国際仏教徒会議の総会において、Phil Stanley教授より報告がなされた。

以上のように、今回のワークショップは、主に総合的なオンライン仏典目録についての議論のみがなされ、テキスト・データベースや画像データベースについては話題にならなかったのが残念であった。また、扱う言語別にディスカッションする時間が、30分程度と短すぎた。もう少し時間がとれば、より有意義なものになっていたのではないと思われる。

(なお、バンコクへの航空券、ならびに現地での宿泊にかかわる費用については、すべて主催者の負担であったことを記しておきたい。主催者に感謝したい。また、今回のワークショップへの参加は、以前、Jeffrey Hopkinsヴァージニア大学名誉教授とともに本研究所を訪問くださったSteven Weinberger (Tibetan and Himalayan Library, Univ. of Virginia) 氏からの推薦によるものであった。この有意義な機会を与えてくれた氏に対し、謝意を表したい)



## 国内学会参加報告①

### 第14回国際真宗学会学術大会に参加して

国際仏教研究 研究員・講師 井上 尚実

6月12日(金)から14日(日)まで、龍谷大学大宮学舎において第14回国際真宗学会学術大会が開催された。「21世紀の世界と浄土真宗：その課題と可能性」をテーマにした今回の大会は、学会創立の翌年1983年に第1回大会が龍谷大学(深草)で開かれて以来、実に26年目ぶりの龍谷大学に於ける開催であった。本研究班では、第1回の大会にも参加された安富信哉教授(特別派遣者・元国際仏教研究チーフ)と、囑託研究員のMark Blum(ニューヨーク州立大学教授を招聘し、井上尚実(研究員)・圓山亜美(研究補助員)・山高秀介(研究補助員)・斉藤覚(研究補助員)が参加した。以下はその概要である。

12日(金)の夕方5時半から京都大学客員外国人講師 Diwakar Acharya氏(ハンブルグ大学Centre for Tantric Studies)による特別記念講演“Mahāyāna Buddhism and Sukhāvati Cult in Ancient Nepal: Reflections on Licchavi Inscriptions of Early Fifth to Early Seventh Centuries”(古代ネパールにおける大乘仏教と浄土信仰：5世紀初頭～7世紀初頭のリッチャヴィ碑文についての考察)が行なわれた。広島大学から龍谷大学に移られた桂紹隆教授の司会により、仏教学の分野における最新の浄土教関連の研究を紹介する内容で、中国で浄土教が興隆する時期の、インド本国における阿弥陀浄土信仰に言及する希少な碑文について、たいへん興味深い講演であった。その後7時から9時半まで夕食をとりながら運営委員会(steering committee)が開かれ、安富教授・Blum教授・井上が出席した。今回の大会を機に、長年に渡り学会の運営に携わってきた運営委員の中心メンバーに交代があり、大谷大学関係では、安富教授が「名誉運営委員」に退き、新たに加来雄之教授が運営委員に推薦された。

13日(土)は朝9時からの開会式に続き、龍谷大学のデニス・ヒロタ教授による“Shinshūgaku and Comparative Thought”(真宗学と比較思想)と題された基調講演があった。ハイデッガーの現象学(*The Phenomenology of Religious Life*)との比較を中心に、真宗における宗教経験の普遍性と独自性を考察され、特に「新たな時間性 new temporality」としての「一念」について重要な示唆を含む講演であった。その後、11時から新築のモダンな清風館に移動して二つの部会に別れ、2日間で、以下

の7つのパネルを含む合計59本の研究発表が行われた。

パネル1. 仏教と心理療法

(コーディネーター:ケネス・タナカ, 武蔵野大学)

Panel 2. The Role of Doctors and Priests in Critical Care and Grief Care

(Coordinator: Jonathan Watts, Jōdo Shū Research Institute)

Panel 3. Possibilities and Problems in *Kyōgyōshinshō* Research

(Coordinator: Michael Conway, Otani University)

Panel 4. Pure Land Buddhist Practices in the Twentieth and Twenty-first Centuries

(Coordinator: Daniel Friedrich, Kyoto University of Foreign Studies)

パネル5. 歎異抄翻訳における諸問題

(コーディネーター:林智康, 龍谷大学)

Panel 6. Shin Buddhist Thought in a Comparative Light

(Coordinator: Dennis Hirota, Ryukoku University)

パネル7. 浄土真宗と伝道—グローバルとローカル

(コーディネーター:川添泰信, 龍谷大学)

日本地区の会場で開催される大会においては英語とともに日本語による発表も認められており、パネル1、5、7は、主として日本語で発表・質疑が行われた。

大谷大学関係の発表では、初日11時からのトップバッターとして山高秀介研究補助員が「曾我量深における法蔵菩薩の自証」という題目で日頃の研究発表を公表し、活発な質疑が交わされた。大会2日目の14日には、本研究所の共同研究『「教行信証」(坂東本)の総合研究のための基盤構築』グループによる企画で、“Possibilities and Problems in *Kyōgyōshinshō* Research”(『教行信証』研究の課題と可能性)と題されたパネル発表が、加来雄之教授・藤元雅文講師・Michael Conway助教とMark Blum教授をパネリストとして行なわれた。それぞれの発表題目は以下の通りで、コンウェイ助教がコーディネーターを務め、発表はすべて英語で行なわれた。

1. Takeshi Kaku, “The Work of Self-Attestation: The Problems and Possibilities of a Structural Understanding of the *Kyōgyōshinshō*.” (伝承と己証: 『教行信証』構造論の課題と可能性)

2. Michael Conway, "A Double Take on History: The Degeneration of Buddhism and the Historicity of Salvation in the *Kyōgyōshinshō*." (歴史の再発見: 『教行信証』における「末法」と「救済の歴史的眞実性」)
3. Masafumi Fujimoto, "On the Significance of Shinran's Holographic Version of the *Kyōgyōshinshō* in English Translation." (英訳における『教行信証』親鸞自筆本の意義)
4. Mark Blum, "Reading the *Kyōgyōshinshō* through the Lens of the Nirvana Sutra: A Tathāgatagarbha Understanding of an Evil Person." (涅槃經のレンズを通して『教行信証』を読む: 「悪人」の如来蔵思想的理解)

事前の共同研究会で検討を重ね、英訳もしっかり準備できていたので、国際学会らしいパネル発表となった。海外の研究者との質疑応答も時間をオーバーするほど活発に行なわれ、休憩時間に外国人研究者から耳にしたところでは、今回の学術大会で最も「学術的」なパネルであるとの高い評価を得ていた。たとえ日本語の使用が認められていても、英語で発表することは、研究に対する国際的な理解を広めるために有意義であることが確認された。

初日の夕方6時から行われた懇親会には、国際仏教研究班の関係で安富教授・Blum教授・井上と3人の研究補助員が、また『『教行信証』研究の課題と可能性』パネルからは藤元雅文講師・Michael Conway助教が参加

し、海外から参加した研究者と交流を深めることができた。特に、今回の学会には、アメリカのコルゲート大学からJohn Ross Carter教授が久しぶりに参加され、筆者は懐かしくお話することができた。今回発表された"On the Lure and Limits of the Self: Theravāda Intimations and Jōdo Shinshū Affirmations" (「自己」の陥穽と限界: 上座部による示唆と浄土眞宗における言明) という論文は、パーリ聖典に登場する悪魔Māraの分析から、初期仏教における「自力・はからい・他力」の問題に関して眞宗と比較して考察されており、初期仏教における「信」の特性・背景について大きな示唆を得ることができた。

研究発表が終わった2日目の夕方5時から行われた学会総会では、運営委員交代の件が審議され、大谷大学関係では安富教授に代わる加来教授の就任が全会一致で承認された。次回2011年の学術大会の開催地については、話し合いの結果、親鸞聖人の750回御遠忌を記念した特別大会とする方向で日本地区(大谷・龍谷・京都女子・武蔵野・同朋大学など関係学術機関)が共同開催することに決定した。開催場所としては京都を希望する声、特に海外からの参加者から強かった。その後の関係機関の調整により、2011年学術大会は大谷大学を開催校とする方向で話しが進みつつある。今後、関係学術機関と連携しながら準備を進めていくことになる。今回第14回の龍谷大学に於ける大会同様、内容的に充実した記念大会になるよう力を合わせていきたい。

## 国内学会参加報告②

### 「パーリ学仏教文化学会第23回学術大会」に参加して

大谷大学 DB 研究 嘱託研究員 清水 洋平

大谷大学DB研究の活動の一環として、2009年5月29日(金)～30日(土)に高野山大学で開催されたパーリ学仏教文化学会第23回学術大会に参加し、研究発表をおこなった。

本学会は、パーリ学仏教文化学の研究者が相互に研究上の協力をし、斯学の向上発展を期することを目的として、パーリ文化研究会を母胎として発足した。パーリ文化研究会は、1977(昭和52)年4月に第1回の研究集会を開催し、13回にわたって研究集会を重ね、そして1986(昭和61)年に従来のパーリ文化研究会を発展的に解消して、新たにパーリ学仏教文化学会が設立された(現在、会員数は約300名)。1987(昭和62)年に第1回学術大会が開催されて以来、今大会で23回目となる。

同学会は、年1回、定例会が関東地域、中部地域、関西地域を年毎に巡回しながら開催される他、国内外の著名な研究者を招聘して年1回、研究会が開かれる。それらの結果は、学術論文集『パーリ学仏教文化学』(JOURNAL OF PALI BUDDHIST STUDIES)として、年1回発行される。2009年現在、1988年度創刊号から第22号まで発行されている。

その他、同学会では、会長である前田恵學博士の私財提供による「前田基金」が設けられており、主にアジア諸国における仏教研究のために派遣される研究者を選抜して研究費が支給されている。この基金支給により、今日まで数多くの研究者が、スリランカ、インド、バングラデシュ、ミャンマー、タイ、ラオス、カンボジア、中国、韓国などに派遣され、非常に有益な研究成果を残している。

参加者は例年スリランカ、バングラデシュ、タイ、中国、韓国などからも参加がある国際的な学会である。

片山一良(駒沢大学教授)氏が新理事長に就任され、初めての開催となる本大会では、研究発表に先立ち、29日(金)に高野山山城院において懇親会がおこなわれ、30日(土)に高野山大学で研究発表が開催された。

懇親会がおこなわれた29日(金)には、まず、大谷大学が所蔵する東南アジア撰述のパーリ語貝葉写本コレクションについて、ラオスにおける貝葉写本研究にも造詣の深い池上要靖(身延山大学教授)氏と意見交換をおこなった。そして、東南アジア大陸部で書写された仏教文献写本を読解する上で有益な、嘗てラオスやヴェトナムで出版され現在では殆ど知られていない参考資

料の情報など、多くの情報を提供して下された。

その後、クメール文字パーリ語貝葉写本研究の権威である田邊和子(東方研究会研究員)氏らと2時間にわたり、意見交換並びに討議をおこなった。内容は、現在、大谷大学DB研究が進めている大谷大学所蔵パーリ語貝葉写本コレクションのデジタル画像データベース化作業について、データベース化における文献の優先順位に関わる稀覯写本の選定などについて討議を重ねた。

また、懇親会は、高野山山城院が会場ということもあり、精進料理での懇親会という趣向を凝らしたものであり多くの参加者と共に盛況におこなわれた。

30日(土)、午前9時から、前理事長である橘堂正弘(相山女学園大学教授)氏の導師で三帰依文の唱和がおこなわれ、つづいて研究発表が始まり、午後16時35分まで、海外研究者を含む14名の発表者が持ち時間25分で研究発表がおこなわれた。以下、発表者と発表題目を記す。

#### 【午前の部】

- 越後屋 正行(駒沢大学大学院)  
「『長部』の改編について—『長部註』『長部復註』を中心として—」
- Chaitongdi Phrachatpong(東洋大学大学院)  
「Lokappadipakasāra(世間灯明精要)の成立背景—第七章(Okāsālokaniddesa、器世間の説明)を中心として—」
- 舟橋 智哉(大谷大学大学院博士後期課程修了・真宗大谷派蓮泉寺)  
清水 洋平(日本学術振興会特別研究員・名古屋大学)  
「Wat Ratchasittharamが所蔵する貝葉写本の調査」
- 田邊 和子(東方研究会研究員)  
「アユタヤ期後期に書かれた折本紙写本の解読」
- 小島 敬裕(京都大学大学院)  
「中国雲南省徳宏地域における上座仏教—地域間比較研究の視点から—」
- 嘉木場 凱朝(中国社会科学院世界宗教研究所副研究員)  
「雲南省における現代大乘仏教の様態」
- 池上 要靖(身延山大学教授)  
「ラオス国ルアンプラバンの仏像の特徴と現状について」

## 【午後の部】

8. Kongkarattanaruk Phrapongsak (龍谷大学大学院)  
「〈止行者・観行者〉と〈定〉について」
9. 佐々木 一憲 (東方研究会研究員)  
「ラフカディオ・ハーンの〈総合仏教〉と〈近代仏教学〉」
10. 小池 清廉 (京都総合福祉協会)  
「死別を契機に発症した精神病患者に対する仏教のかかわり」
11. 亀山 健志 (中京女子大学非常勤講師)  
「上座仏教儀礼の構造にかんする考察」
12. 矢野 秀武 (駒澤大学准教授)  
「現代タイにおける国家行政と仏教」
13. 原田 正美 (大阪大学非常勤講師)  
「ビルマ所伝「ザブパティ (Jambupati) 王の事跡」(1772)の意義について」
14. 小林 圓照 (花園大学名誉教授)  
「善友 (kalyāṇa-mitta) 思想の展開とアジアの文化」

上記のように、研究発表はパーリ語仏教文献に対する考察を中心に、ラオスにおける仏像の特徴や中国雲南省徳宏地域における上座仏教の特徴についての発表など多岐にわたり、それぞれについて活発な質疑応答があった。

筆者は、大谷大学所蔵パーリ語貝葉写本コレクションの、コレクションとしての全体的な特徴などを明確にするため、昨年度から他機関と共同で実施している現地調査の報告をおこなった。内容は、2008年11月4日～2008年12月22日、タイ王国バンコクにおいて、前王朝の都であったトンブリ地区 (Bangkokyai区) に所在し、バンコク地域の古刹の中でも、貝葉写本の所蔵量が最大級であり、手付かずのまま写本が残されているとされる王室寺院Wat Ratchasittharamが所蔵する貝葉写本の調査をおこなった。その折に検分したおよそ400套：約3,600 phūk (束) の貝葉写本のコレクションとしての特徴と調査の概況を報告した。

発表後、先述の片山氏や蓑輪顕量 (愛知学院大学教授) 氏から、今後の調査・研究の進展が待たれる旨とまだ学界に知られていない数多くの仏教文献について、今後の研究方法のあり方、扱い方などについてご意見を頂いた。

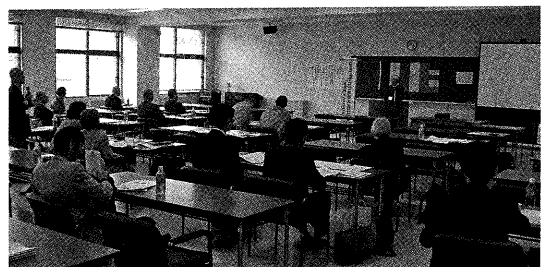
原田正美 (大阪大学非常勤講師) 氏の「ビルマ所伝「ザブパティ (Jambupati) 王の事跡」(1772)の意義について」の発表は、大谷大学所蔵パーリ語貝葉写本コレクションの中に *Jumbūpati-sutta* (請求番号: LXV-38) と記される文献が所蔵されているのであるが、大谷大学所蔵版とは異なるビルマ伝承のものについて、ビルマ

的展開をテキスト、歴史的な文脈から考察されたものであり、大谷大学所蔵版のテキストを考察する上で大いに参考になるものであった。

更には、*Jambupati* (ビルマ語読み *Zabupati*) とは、ビルマにおいては宝冠仏の総称ともなっており、タイ、ラオスなどでは、装飾された仏像の一つのスタイル名でもある。そのことから、池上要靖 (身延山大学教授) 氏の「ラオス国ルアンプラバンの仏像の特徴と現状について」の発表においても、ラオスで *Som-khouan* と呼ばれる宝冠仏についての考察があり、*Jumbūpati-sutta* を考える上で本発表も大変有益なものであった。本発表はまた、身延山大学がラオス政府機関 (情報文化省・考古学博物館局) と共同で、2001年2月から2006年3月まで計10回にわたりおこなってきた *Luang Prabang* 世界遺産地区における35ヶ寺の木造仏を中心とする仏像の修復調査からの報告であり、学界では、ラオスの仏像について、僅かに鑄造仏像についての研究があるのみであり木造仏を主とする研究は皆無であるとされるため、そのような点からも大変貴重なものであった。

その他、東南アジア大陸部の上座仏教の特徴を踏まえた上で、学界ではあまり知られていない中国雲南省徳宏地域における上座仏教の特徴を、フィールドワークを通じて論じられた小島敬裕 (京都大学大学院) 氏の「中国雲南省徳宏地域における上座仏教—地域間比較研究の視点から—」の発表や、タイの公認宗教制度と宗教行政の関連組織についての考察を踏まえた上で、宗教行政の主体と活動などを論じられた矢野秀武 (駒澤大学准教授) 氏の「現代タイにおける国家行政と仏教」の発表も、東南アジア大陸部 (タイ地域中心) で筆写された仏教文献貝葉写本を扱う我々にとっては、上座仏教における写本文化を考える上で、また現地での写本調査・研究の進め方を考える上で、大きな知見を与えるものであった。

以上、本学会に出席して得られたこのような多くの情報や知識を、大谷大学所蔵パーリ語貝葉写本コレクションのデジタル画像データベース化作業に伴う、稀観文献の選定や現地調査活動の促進に向けて大いに活かしていきたい。



# 学術共同研究報告

## 東北師範大学との共同研究・公開研究会報告

国際仏教研究（中国班） キヤップ・教授 浅見 直一郎

国際仏教研究中国班は、本学と提携関係にある中国吉林省長春市の東北師範大学と共同研究を積み重ねてきた。今年度は研究の題目を「中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化」と定めたが、このたびその一環として東北師範大学歴史文化学院（学部に相当）の曲曉範教授と胡赤軍副教授のお二人が来日され、両先生を中心に公開研究会を開催することができたので、ここにその概略を御紹介する。

公開研究会は7月10日（金）午後4時10分から、本学響流館3階のマルチメディア演習室において行なった。両先生と真宗総合研究所所長の乾源俊教授のほか、本研究班からは嘱託研究員の広川佐保・新潟大学准教授、研究員の桂華淳祥・松川節両教授、元研究員の木場明志教授、研究補助員で通訳担当の王奕明氏および浅見が出席した。

最初に、広川先生が「映画『蒙古横断』—1920年代のモンゴル社会」と題して報告された。『蒙古横断』は、1910~20年代に内蒙古地方で企業の設立や農場・牧場の経営などの活動を行なった薄益三（うすき ますぞう）の甥、薄守次（うすき もりじ）が撮影した記録映画である。薄は巴林（バーリン）右旗の第13代親王、ジャサク・ジャガルと親交があったが、1925年、北京在住のジャガルが巴林右旗に帰郷する際に同行し、道中のありさまや内蒙古の人々の暮らし、さまざまな行事の様子などを、満鉄の援助を受けてフィルムに収めたのであった。撮影の背景から「国策映画」の性格をもつことは否定できないが、当時の東部内蒙古地方の状況が活写された重要な史料である。

この日は時間の制約もあり、映画のごく一部のみが上映されたが、曲・胡の両先生は非常に貴重な映像である、と評価され、また、たとえばシラムレンを渡河するシーンについて「今のシラムレンにこれほどの水量は無いと思う」と漏らされるなど、具体的な場面についての感想も述べられた。東北師範大学にはモンゴル史を専攻するスタッフもいるので、今後の共同研究においても継続的に考察の対象としていきたいと考えている。

次いで曲曉範教授が「日本仏教徒小栗栖香頂北京留学、上海開教活動与近代中日文化交流：1873-1876」と

題して報告された。最初に、明治維新後に初めて中国へ渡り、開教した日本の仏教徒として東本願寺の小栗栖香頂を紹介し、中国の従来の研究ではこの時期の留学生に対する評価が非常に低いこと、中日文化交流の視角からではなく日本による中国侵略の歴史の範疇に入れて扱ってきたこと、を指摘した上で、小栗栖香頂の事績を、中国留学の背景、北京への留学、上海での布教と江南各地への旅行、の三項目に分けて具体的に跡づけ、最後に小栗栖香頂の中国留学の意義として、第一に、近代日本仏教者の海外留学として、また近代中国による外国人留学生の受け入れとして最初期のものであったこと、第二に、東本願寺（真宗大谷派）による中国布教の起点であったが、日本政府の海外植民政策推進に迎合し、日本仏教文化の中国侵略の先端ともなったこと、第三に、大量の歴史文献（中国語・日本語とも）の収集・保存がなされたこと、の三点を結論として提示された。

曲先生は二度目の来日であるが、今回の公開研究会で、中国においてはほとんど知られていないと思われる小栗栖香頂の事績を、木場教授の研究や本学所蔵の小栗栖香頂関係の文献を活用して報告されたことは、共同研究の収穫の一つに数えてよいであろう。

最後に、初来日の胡赤軍副教授が「戦後中国政府和人民対東北地区日本僑民的遣返和安置」と題して報告



前列左より 胡赤軍副教授 木村宣彰学長 曲曉範教授  
乾研究所長  
後列左より 山本主事 浅見・桂華・松川研究員  
木場教授 2009.7.7 於：学長室

された。報告では、中国政府は、1946年4月から1953年9月までの間、関内（東北以外）各地300万、東北地区100万の日本僑民を平和裡に日本へ送還したが、このことが、長期にわたって中日両国間に存在した日本による中国の植民地化、侵略的移民問題を処理し、中日両国の友好関係を築いた、と評価し、送還の具体的な経緯について言及された。胡先生は初来日であり、今後は先生の研究テーマと共同研究の題目とのすり合わせにも留意する必要がある。

曲曉範・胡赤軍両先生は、7月6日(月)の夜に関西空

港に到着され、13日(月)の朝には同じく関西空港から帰国の途につかれるという日程で、実質6日間の日本滞在であった。この間、上記の公開研究会をはじめ共同研究会、各種の歓迎会に参加されたほか、本学図書館、および精華町の国立国会図書館関西館での調査と史料収集を精力的にこなされ、合間を縫って奈良の仏教史跡に足を運ばれ、また京都では、折から行なわれていた祇園祭の鉦の曳き初めをご覧になったあと、木場教授の案内により東・西両本願寺を見学されるなど、あわただしくも充実した日々を送られた。

## 研究調査出張報告

### 真宗に生きた人々へのインタビュー調査報告

真宗同朋会運動研究 チーフ・教授 水島 見一

はじめに

本研究班では、「群萌における求道と獲信」というテーマを掲げ、真宗の門徒の方々にインタビュー調査を行い、現場における同朋会運動の具体相を浮き彫りにすることを目的としている。そして本年度4月から現在（9月）にいたるまで、全国各地の門徒の方々20名にインタビュー調査を行った。

本研究のインタビュー調査の特色として、真宗大谷派の各機関と連携、また情報交換のネットワークを構築しながら研究を展開していることが挙げられる。

今回、報告する調査は九州の真宗大谷派久留米教務所から御紹介いただいた中島尋子氏、そして北海道の札幌大谷大学での置田陽一氏・岩津由祐氏、真宗大谷派旭川別院にて藤部登氏・飛谷和恵氏に行った調査概要を報告する。なお各インタビュー調査の詳細な内容については、ここでは触れないこととする。

本研究のインタビュー調査の基本は、こちらから特定の質問をするのではなく、調査対象者各自が、自分の人生を振り返り、真宗との具体的な出遇い、そのきっかけを端緒として、いわゆる自分史を語ってもらうというものである。このインタビュー調査は、長時間となり、調査に御協力いただいた方々には、貴重な時間を割いていただいたこと、また一般の調査では決して

触れることのできない、深い内容にまで踏み込んで語っていただいたことに深く感謝の意を表したい。皆さま方の御協力を研究班一同は、真摯に受け止め、真宗の今後のあり方を探究する意義を新たにしたことである。

中島尋子氏へのインタビュー調査の概要

日時：2009年8月8日(土) 15:00~18:30

場所：福岡県久留米市の中島尋子氏宅

中島氏は本インタビュー調査の中で、御自分の人生を深く振り返りながら、真宗との出遇いのきっかけを中心に、非常に多くのことを語っていただいた。そして中島氏の日々の暮らしと真宗が一体となっていることを語っていただいた。その後、研究員が中島さんの話を振り返り質問をすることで、さらに深く語っていただくという形式をとった。

また、中島氏からはご自分の行っておられる具体的な同朋会活動についても語っていただいた。それは日々の暮らしの中での展開（ご家族や友人との関わり）から、聞法の過程、そして様々な寺院・教務所での行事への取り組みなどであった。

置田陽一氏・岩津由祐氏へのインタビュー調査の概要

日時：2009年6月19日(金) 14:00~18:00

場所：札幌大谷大学

置田氏は、札幌別院の門前町にある仏具屋さんで、子

供の頃から行事などで仏教に親しんでいたという原体験から語っていただいた。さらに聞法のきっかけと、同朋会運動との関わりについて語っていただいた。またその中で、当時の同朋会運動が直面していた危機（社会における創価学会の展開）についても詳しく語られた。この危機感が、同朋会運動の大きな原動力となっていたということを知ることができた。当時の状況を全く知らない現代の学生には、全く信じられない話であったが、当時の宗門の危機感がひしひしと伝わってきたインタビューであった。

岩津氏は、現在25歳であり、現代の若者における真宗の了解を聞くことができた。岩津氏は聞法生活のきっかけとして、高校時代の友人（後に住職となる）との出会いについて語っていただいた。当時の仏教への反感について、あるいはご自分の人生経験を振り返られ、自分自身への気づきについて語っていただいた。それがご自分の仏法との出遇いであると語られた。このような若い方に真宗が伝わっているのを目の当たりにし、大いに勇気づけられたインタビュー調査であった。

#### 藤部登氏・飛谷和恵氏へのインタビュー調査の概要

日時：2009年6月20日(土) 13:00~18:00

場所：真宗大谷派旭川別院

藤部氏は、ご自分の人生の歩みの御苦勞から語っていただいた。その中で、長年にわたり暁鳥敏の『歎異抄講話』を熟読され、真宗への学びを深められたこと、また別院の聞法会に参加するきっかけについて語って

いただいた。藤部氏は、インタビューの中でたびたび「宿業に泣く」という言葉を語っておられ、ご自身と深く向き合われた軌跡を学ばせていただいた。生活の中で、真宗と向き合うこと（自分自身と向き合う）の具体的な姿を教えていただいたインタビュー調査であった。

飛谷氏は、ご結婚をきっかけとする真宗との出遇い、別院での聞法生活の始まりから語っていただいた。また飛谷氏は、別院での聞法会はもちろんのこと、様々な文化活動にも積極的に参加されていることを語られ、そこでの真宗の意義、別院の地域における重要な役割を改めて教えられた。同朋会運動は、即聞法活動となることが多い。しかし、それだけではなく、様々な行事や文化活動を通して、地域社会の中で息づくものであり、そのことによって、人々の支えとなる真の同朋社会があることを教えられたインタビューであった。

#### おわりに

以上の方々へのインタビュー調査を通して、各地における真宗同朋会運動の様々なあり方を知ることができた。今後は、ご協力いただいた方々のインタビュー調査の内容の精査、あるいは補足調査などを通して、真宗に生きた人々の具体的な姿を浮き彫りにしていきたいと考えている。そのことを通して、真宗同朋会運動の意義と課題を明らかにしていくものである。



左から、佐々木研究補助員、中島尋子氏、山高研究補助員、水島教授、富岡講師、安居研究補助員



# 2009年度全国大学史資料協議会西日本部会「第1回研究会」報告

## 全国大学史資料協議会西日本部会 2009年度総会ならびに 第1回研究会を開催して

大谷大学史資料室 研究補助員 大畑 博嗣

6月25日(木)に大谷大学史資料室も会員である全国大学史資料協議会西日本部会2009年度第1回総会ならびに第1回研究会が、本学響流館3階マルチメディア演習室に於いて行われた。今回、本学での総会・研究会が行われたのは、前年12月に全国大学史資料協議会西日本部会の研究会が京都国際マンガミュージアムで行われた際に、西日本部会幹事校から打診があり、当資料室室長や研究所事務局を始めとする関係部署の承諾を得て開催されたという経緯がある。

当日は、総会が行われた後、本学准教授である東館紹見氏から「大谷大学のあゆみ」という講題で講演が行われ、次に筆者が「大谷大学史資料室の変遷と大学史関係史料の整理・保存について」という講題で講演を行った。

東館氏の講演は、スライドを用いながら近世から現代にかけて本学の歴史について講演を行った。本学の前身である学寮は、東本願寺第14代琢如の時に東本願寺寺内町にあった御堂衆寺院の東坊（現在の東光寺）に創設されたことに始まる。その後、学寮は涉成園（枳殻邸）内西側に移転される。この時に初代講師として光遠院恵空が就任する。宝暦5（1755）年には、2代講師香巖院恵然の建議により、寺内町の高倉魚棚（現、東本願寺飛地境内地、高倉会館・高倉幼稚園・大谷派教学研究研究所）に移転されることになる。高倉学寮時代には、学寮奉行（坊官）—講師—副講—擬講—（上首—知事）—寮司—擬寮司—大衆と学寮内の組織化がなさ

れた。また、3代講師理綱院慧琳門下から香月院深助や円乗院宣明を輩出し、それぞれ5代、6代の講師に就任し、教学の隆盛をみた。時代が下り、幕末になると、儒者・国学者による僧侶批判、西洋諸学問・思想の流入による「外学」への関心から、慶応4（1868）年には、護法場が設置され、国学・儒学・天学（自然科学）・洋学（キリスト教）などの学問を学ぶ場となった。護法場の立場は守旧的であるが、学問の内容・方法が前近代の学問・思想・組織の問題点を照射していた。しかし、学問のあり方、東本願寺の体制改革への声が高まり、種々の軋轢を生むことになった。

近代を迎えた東本願寺は、文部省所管の教育機関とは別の道を模索し、近代の僧侶養成機関として明治6（1873）年、学寮に変わり貫練場を設置する。貫練場は、後に大教校・貫練教校・大学寮と名前を変え、最終的に大学寮にあった宗乗専攻院・安居を真宗高倉大学寮とし、本科第一部・本科第二部・研究科の3つを真宗大学として分化する。その後、清沢満之等を中心とする教団改革運動の結果、真宗大学は清沢を初代学長として明治34（1901）年に東京に移転・開校するが、10年後には本山当局の決議により、真宗大学は京都へ戻り、高倉大学寮と統合し真宗大谷大学とすることが決定され、大正2（1913）年に現在地へ移転・開校される。現在地への移転以降の真宗大谷大学では、著書が宗義違反であるとして昭和3（1928）年に金子大栄が教授を免ぜられ、続いて昭和5（1930）年には曾我量深が教授の職を辞する「異安人」事件が起こった。また、日本国中が戦時体制へと転換していく中、大谷大学でも軍事教練・勤労動員が行われるようになり、昭和18（1943）年10月には徴兵猶予停止により学徒出陣が行われ、大谷大学からも多くの学生が戦地へと赴いた。一方、学内では大学内に大谷教学研究研究所が設置され、所内には日本教学部・真宗教学部・興亜教学部・人文教学部が置かれた。

終戦後、大谷大学は「文科系単科大学」の規模と内容を保ち、真宗学、仏教学、哲学・宗教学、東洋史、国文学、独文学などの学科が設置され、新制大学として再出発するのである。その後、学園闘争などを乗り越



研究発表 東館准教授 於：マルチメディア演習室

え、昭和56（1981）年から学園総合整備計画に基づき、真宗総合研究所の設置・真宗総合学術センター「響流館」の開設・博物館の開設などを行い、現在の大谷大学に至っているという内容であった。

次に筆者の講演は、大谷大学史資料室に至るまで、真宗総合研究所内に設置された大学史関係の研究班の変遷と、現在当資料室で行われている日常的な業務（主に『大谷大学資料』（通称：黒ファイル）の整理・保存作業）と当資料室が抱える業務的な課題・展望について講演を行った。大谷大学における大学史関係の研究班は、近世の学寮時代から大谷大学の歴史を起点とした大谷大学三百年史編纂を目的とする「学事研究」が発端となっている。しかし、真宗総合研究所の組織改編に伴い、年史編纂が三百年史編纂から初代学長の清沢満之による真宗大学東京移転・開校を起点とする近代百年史編纂へ年史編纂の視点がシフトしていくが、各研究班は年史編纂事業を目的として大学史関係史資料の収集に務めてきたのである。そして、「大谷大学近代史研究班」と清沢満之の業績を研究する「清沢満之研究班」の合併、『大谷大学近代一〇〇年のあゆみ』や『大谷大学百年史』・『清沢満之全集』の刊行を機に大学史関係史資料だけでなく、清沢満之関係史料の管理・保存も併せて行うこととなった。このようなことから、過去の大学史関係の研究班は、大学の年史編纂・清沢満之の業績などを明らかにするために、研究班が細分化・統合が行われる。その結果、現在の資料室では、これまでの研究班が収集した史資料の管理・保存が主目的となっている。

そして、資料室の業務的な当面の課題として、①『大谷大学資料』の保存方法、②戸籍抄本などの個人情報管理、③資料室所蔵の写真史料の保管作業、④専任職員の不在の四つの課題が挙げられる。さらに、現在、真宗大谷派を含めた真宗十派は、2011年に厳修される親鸞聖人七百五十回御遠忌に向けて活動を行っている。研究所内でもその動きに合わせて、「親鸞像の再構築」を研究目的とする、「大谷大学親鸞聖人七百五十回御遠忌特別指定研究班」の設置など御遠忌を意識した研究組織へと移行している。しかし、御遠忌の2年後の2013年に大谷大学は、大正2（1913）年に真宗大学が東京から現在地へ移転して百年の節目を迎える。そこで、大谷大学史資料室では、大学京都移転百年を迎えるにあたり、資料室及び大学を挙げて記念誌の出版や記念事業、博物館とコラボレーションによる展示等といった行事を行うのか、今後問題になってくるのではないかと考えられる。

研究会終了後、参加者は大谷大学博物館・図書館、真宗総合研究所事務局内の当資料室作業スペースにおいて黒ファイルなどの見学を行い、見学会終了後には研究交流会が開かれ、各大学との活発な意見交換が行われ、全国大学史資料協議会西日本部会 2009年度総会・第1回研究会は盛会に閉会した。

最後に末筆ながら、全国大学史資料協議会西日本部会2009年度第1回総会ならびに第1回研究会を本学で開催するにあたり、研究所事務局を始め御尽力頂いた関係者ならびに関係部署の皆様へ深く感謝申し上げます。



本学響流館前 2009.6.25 撮影

# 真宗総合研究所彙報 2009. 5. 1～2009. 9. 30

## ■研究所関係

### ◎真宗総合研究所委員会

- ◇6月3日(水) 17時10分～ 於:第4会議室(博綜館5F)
1. 2009(平成21)年度「指定研究」の研究計画並びに研究体制について
  2. 2008(平成20)年度「決算」について
  3. 2009(平成21)年度「予算」について
  4. その他
- ◇6月24日(水) 12時15分～ 於:第4会議室(博綜館5F)
1. 2008(平成20)年度「決算」について
  2. 2009(平成21)年度「予算」について
  3. その他
- ◇7月14日(火) 12時30分～ 於:J101教室(尋源館1F)
1. 2009(平成21)年度「指定研究」研究補助員の辞退に伴う、補充採択について
  2. その他
- ◇9月28日(月) 12時10分～ 於:第3会議室(博綜館5F)
1. 2010(平成22)年度「一般研究」の募集について
  2. その他

## ■特別指定研究

### 大谷大学親鸞聖人750回御遠忌記念特別指定研究

- ◇5月13日(水) 16:10～17:40
- 於:真宗総合研究所ミーティングルーム
- 第20回研究会  
議題
- ・今年度の研究活動方針について
  - ・御遠忌記念論集『親鸞像の再構築』について
  - ・文献目録の作成について
- ◇6月30日(火) 16:10～17:40
- 於:真宗総合研究所ミーティングルーム
- 第21回研究会  
議題
- ・御遠忌記念論集『親鸞像の再構築』について
  - ・文献目録の作成について

御遠忌記念特別指定研究班では、真宗学、仏教学、哲学、社会学、史学、文学など様々な専門分野の研究者の協力を仰いで、御遠忌記念論集『親鸞像の再構築—親鸞を訪らう—』の刊行を目指している。そのため、上記全体研究会の他、論集の体裁など具体的な課題を検討する研究員同士による会議を随時行ってきた。

また、文献目録の作成については、パート会議を随

時行うとともに、作業を日常的に行っている。

## ■指定研究

### 国際仏教研究

〈英語班〉

《会議・研究会》

- ◇佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」翻訳研究
- 第1回研究会 5月12日 17:00～19:00  
(真宗総合研究所内ミーティングルーム)
- 第2回研究会 6月23日 17:00～19:00
- 第3回研究会 7月14日 17:00～19:00
- 第4回研究会 8月4日 16:00～18:00
- 第5回研究会 9月15日 17:00～19:00

### ◇近代教学アンソロジー

6月15日(月) 16:00～18:00

英訳出版に向けての打ち合わせ。

於:真宗総合研究所ミーティングルーム

### 《学会参加》

6月12日(金)～14日(日) 龍谷大学大宮学舎において「21世紀の世界と浄土真宗—その課題と可能性」というテーマで開催された第14回国際真宗学会に研究員・補助員が参加した。

### 《公開講演会》

①7月2日(水) 16:10～18:00

於:マルチメディア演習室(響流館3F)

講師: Kósa Gábor氏

(エトウエシ・ロラード大学准教授)

題目: 中国マニ教聖典にみられる仏教語彙

②9月14日(月) 16:10～18:00

於:マルチメディア演習室(響流館3F)

講師: 羽田信生氏

(国際仏教研究嘱託研究員・毎田周一仏教センター所長)

題目: 三願転入と米国における真宗

③9月29日(火) 16:10～18:00

於:マルチメディア演習室(響流館3F)

講師: 辛嶋静志氏

(創価大学国際仏教学高等研究所教授)

題目: 仏教文献学と仏教思想史研究:

初期大乘仏典の文献学的研究

〈ドイツ・フランス班〉

- ◇マールブルク大学神学部教授Dietrich Korsch氏の  
*Luther: Eine Einführung* (Mohr Siebeck) の翻訳を継続。

◇2010年5月にパリで開催予定のフランス国立高等研究院とのシンポジウムに向けて、各研究員が発表のための研究・執筆を継続。

《中国班》

①大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」海外布教関係部分の資料一覧作成

中国華北地域関連の綴資料(仮番号19~25)の一覧作成作業を継続中。引き続き、華中関連資料(仮番号26~)にも順次着手する。

②中国東北師範大学との共同研究「中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化」の推進

1. 2009年7月6日(月)~13日(月)、曲曉範東北師範大学教授、胡赤軍東北師範大学副教授を招聘し、浅見直一郎研究員、桂華淳祥研究員、松川節研究員、木場明志本学教授、広川佐保囑託研究員とともに本学にて研究活動を行い、公開研究会を開催した。

7月10日(金) 16:10~18:30

於:マルチメディア演習室(響流館3F)

○日本佛教徒小栗栖香頂北京留学、上海開教活動與近代中日文化交流:1873-1876

東北師範大学歴史文化学院 曲曉範 教授

○戦後中国政府和人民対東北地区日本僑民の遣返和安置

東北師範大学歴史文化学院 胡赤軍 副教授

2. 2009年8月27日(木)~9月1日(火)、浅見キャップ(研究員)、松川(研究員)、王奕明(研究補助員)、木場(本学教授)、広川(囑託研究員)の5名は、中国北京市、内モンゴル自治区赤峰市(赤峰市区・巴林右旗・巴林左旗)において、モンゴル仏教及び華北仏教の研究調査、特に映画「蒙古横断」の撮影当時(1925年)と現在との比較調査・研究を実施した。

西藏文献研究

《公開研究会》

「チベット仏教学の未来」

講師:ダムドゥル氏

(中国蔵学研究中心宗教研究所所長)

日時:7月14日 17時50分~

場所:マルチメディア演習室(響流館3F)

大谷大学DB研究

《事務連絡会議》

◇6月2日(火) 12:10~12:50

議題

2009年度活動予定についての打ち合わせ  
場所:真宗総合研究所ミーティングルーム

《出張》

◇2009年5月29日(金)~5月30日(土)

出張者:清水洋平(囑託研究員)

出張先:高山山大学

目的:パリー学仏教文化学会第23回学術大会における研究発表

発表題目:Wat Ratchasittharamが所蔵する貝葉写本の調査

《調査・撮影》

◇2009年7月31日(金)~8月7日(金) 10時30分~16時30分

調査・撮影メンバー:清水洋平(囑託研究員)

岡本隆明(囑託研究員)

林 哲照(研究補助員)

撮影場所:響流館4Fメディア編集室内撮影室

目的:大谷大学所蔵貝葉写本デジタル化撮影作業

真宗本廟(東本願寺)造営史研究

本プロジェクトは、度重なる造営を支えた門徒の懇念と、資材・労力・資金の提供、および大工・職人・工匠等の諸技術の結集である壮麗な伽藍の歴史の変遷を研究し、『本願を受け継ぐ人びと—真宗本廟(東本願寺)造営史—』の一書にまとめようとするものである。本年最終年度は、原稿の整理・調整・編集が主たる作業であるが、加えて、関連諸史料の補足調査、翻刻史料の確認等が、継続して重要な作業となる。また、引き続き、公開研究会、執筆者会議、事務連絡会議等を開催し、全体像の把握や論点を整理・共有化していく。

《事務連絡会議》

第25回事務連絡会議

◇5月15日(金) 14:30~16:00

議題:①2009年度研究計画について(確認)

②原稿提出状況並びに編纂計画(本編の体裁、編集体制等)について

③松井家(松井建設)所蔵史料の再調査について

④その他

場所:真宗総合研究所ミーティングルーム

第26回事務連絡会議

◇9月4日(金) 13:30~15:00

議題:①原稿提出状況及び編纂計画について

②資料調査の進行状況について

③長浜・大通寺調査について

④松井家(松井建設)所蔵史料の再調査について

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

《全体会議》

第11回公開研究会(第12回全体会議)

◇7月29日(水) 15:00~18:00

議題：①講演会

題目：御坊格寺院本堂の建築的構成

——その空間と意匠

講師：櫻井敏雄氏

(嘱託研究員・近畿大学名誉教授)

題目：本願寺寺内、境内の位置と大きさの変遷—吉崎から京まで—

講師：伊藤延男氏

(嘱託研究員・神戸芸術工科大学名誉教授)

②意見交換会

場所：マルチメディア演習室(響流館3F)

《執筆者会議》

第9回執筆者会議

◇5月29日(金) 16:00~18:00

議題：①研究報告

題目：相統講の展開と地域の本山護持講

講師：蒲池勢至氏(同朋大学非常勤講師)

題目：東本願寺建築の系譜

講師：川上貢氏

(嘱託研究員・京都大学名誉教授)

②2009年度研究計画

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

《報告原稿読み合せ会》

第1回報告原稿読み合せ会

◇6月19日(金) 15:00~19:00

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

第2回報告原稿読み合せ会

◇6月26日(金) 14:00~19:00

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

第3回報告原稿読み合せ会

◇7月3日(金) 15:00~19:00

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

第4回報告原稿読み合せ会

◇7月10日(金) 15:00~17:00

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

第5回報告原稿読み合せ会

◇7月17日(金) 15:00~19:00

場所：響流館3階演習室1

第6回報告原稿読み合せ会

◇7月24日(金) 15:00~19:00

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

第7回報告原稿読み合せ会

◇7月31日(金) 15:00~19:00

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

第8回報告原稿読み合せ会

◇8月5日(水) 15:00~19:00

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

真宗同朋会運動研究

本研究は、今年度から、真宗総合研究所の指定研究として始まった。研究内容は、3年後に50周年を迎える真宗大谷派教団の提唱した信仰運動である同朋会運動の全貌を、「群萌における求道と獲信」という切り口から明らかにしようというものである。

このことを明らかにするために、具体的には「門徒」として生活されている方々に、インタビュー(真宗の伝統において、「聞き書き」と称される手法がある)をし、ご自身の求道と、真宗の教法との出遇いを話して頂くことを通して捉えていく。それを、成文化し、社会的な見地から分析していくことを考えている。このことから実際に、真宗の門徒の方々へのインタビューによって、同朋会運動という宗門(上)からの施策が、実際どのように門徒(下)に浸透し得たか、ということを明らかにし、同朋会運動の実情を浮き彫りにしていくことを目的としている。

また、もう一つの方向として、各方面の有識者の方々からご意見を頂くことを通して、同朋会運動を教団外の視点から見つめ、社会的な位置づけ、親鸞思想の現代的意義、そして親鸞思想の可能性を、明らかにすることを目的としている。

このような大きな二つの展開から、本研究を進めていく。これまでの研究経過として、聞き書き調査に関しては20名に実施し、成文化の作業中である。また、8名の有識者に来ていただき8回の公開研究会を行った。以下に研究会の概略を挙げる。

《今研究の指針を学ぶための研究会》

2008年11月10日 於：尋源館会議室(尋源館2F)

●末木文美士先生

末木先生には、教団外からの視点で近代真宗教団の問題点を指摘していただいた。特に清沢満之に始まる『精神主義』という名の信仰運動の問題点や、その社会性、または教団において信仰運動ということが成り立つのか等のご指摘をいただいた。また、現代仏教が一

一般的に葬式仏教と言われるような、儀式執行という形で相続されている寺檀関係を、もっと大きな視野で捉えなおしていく必要性を指摘された。

2008年12月8日 於：H502教室（博綜館5F）

●福島和人先生

福島先生には、ご自身の授業で実際に聞き書き調査を実施したご経験から、聞き書き調査を行うにあたっての姿勢を考えていただいた。また、信心の問題を個人の問題として社会と切り離すことによって生じる信仰の主体性の欠落という問題点を指摘された。信心（信仰）は社会の中での個であり、個の自覚は必ず、社会へ広がりりと深さを持って顕れると指摘された。

2009年4月10日 於：第3会議室（博綜館5F）

●二階堂行邦先生

二階堂先生には、現場の住職としての具体的な歩みと、その中で如何に同朋会運動と関わってきたかをお話いただいた。同朋会運動は、組織の上層部から下層部へと流れる施策では、現場に根づいていかないという矛盾を含みつつ推進されている、という同朋会運動の性格を指摘された。そこで、大事なのは、組織の上層部からの施策を、上層部からの施策で終わらせずに、その施策に関わった人を現場住職が大切にして、輪読会や座談会をしていくことが大事であるとのことであった。また、帰依と依存ということの違いについても指摘され、信仰主体が独立する事への重要性を提言された。

2009年6月2日 於：マルチメディア演習室（響流館3F）

●信楽峻磨先生

信楽先生には、「真宗学雑感」というタイトルで、先生の歩んでこられた仏道をお話して下さった。まずは、戦時教学の戦争責任について、真俗二諦論の問題性を指摘された。また、覚如・存覚教学の問題性を指摘され、親鸞教学に帰ることの重要性を提言された。

2009年6月5日 於：第2会議室（博綜館5F）

●下田正弘先生

下田先生には、本研究チーフである水島見一著の『大谷派なる宗教的精神』に対する呼応という形で、「真俗二諦論の現代的な意義について」というタイトルでお話していただいた。そこでは、同朋会運動は、形骸化された従来の檀家・門徒制度への反省に立って興起されたものであるが、形骸化された檀家・門徒制度は、反省されるべきネガティブな意味だけではなく、ポジティブに捉えられる過去の遺産ではないか、と提言された。

また、目的を失った資本主義社会において、方向を見出していくためには、彼岸（此岸を越えた世界）に立脚していかなければならないのではないのか、ということの問題提起された。

2009年6月9日 於：第5会議室（博綜館5F）

●近藤章先生

近藤先生からは、住職として現場で同朋会運動を如何に進めていくかということについてお話いただいた。先生のお寺では、保育園や若者たちが集まる場を開かれている。先生はそれらの場を通して、親鸞の教えを具体的に考えておられる。特に子どもたちや若者たちとの関わりの中で同朋会運動が如何にあるべきなのかを指摘していただいた。同朋会運動という宗門の信仰運動が人間を誕生させる運動である限り、青少年への教育という視点は、看過できない重要な事項であることを指摘していただいた。

2009年6月18日 於：マルチメディア演習室（響流館3F）

●マイケル・パイ先生

マイケル・パイ先生からは、真宗教団における同朋会運動の現在の課題を、教団の倫理的要請の視点から、真宗教団として如何にして一般社会における倫理的・道徳的要請に答えていくのかということをお話していただいた。先生のご講演をとおして、真宗教団への倫理的・道徳的要請から、我々真宗教団がその施設を一般に開放し、「願生（信心）」という真宗独自の信仰を世に流布することが目下の課題であるとの指摘をいただいた。

2009年7月7日 於：第5会議室（博綜館5F）

●阿満利磨先生

阿満利磨先生からは、同朋会運動について、その運動の原型が信仰運動にあることとその信仰運動は、本来教団という組織において行われるのではなく、一個人の信仰に根ざしたところから行われるべきであるという、信仰運動の純粋な性格を指摘していただいた。先生は同朋会運動について思想ではなく制度として同朋社会を顕現しようとしている点に価値を認められておられ、教団が真に信仰運動の重要性を認識している点を評価されていた。

また課題として、信仰運動とは本来、個人的に行われるものであり、組織を通して行われると、ややもすれば教条主義に陥り、純粋な信仰を教団が一般に開放できなくなるという矛盾を抱えるのではないかという課題を指摘していただいた。

大谷大学史資料室

※大谷大学史資料室は、1年間(2008.5.1~2009.9.30)の彙報を掲載します。

(2008年度)

【講演会】

- ・2009年3月6日(金) 公開講演会  
講 師 阿部小涼氏(琉球大学法文学部総合社会システム学科政治・国際関係専攻課程准教授)  
講 題 「廃墟のなかの大学」～沖縄戦後・反抗・アクティヴィズム～ \*詳細は、前号(No.54)参照  
於 マルチメディア演習室(響流館3F)

【他大学との交流】

- ・2008年5月30日(金)  
全国大学史資料協議会 西日本部会  
2008年度総会・第1回研究会  
於 神戸松蔭女子学院大学  
参加者 大畑博嗣(研究補助員)、小野賢明(研究補助員)
- ・2008年7月22日(火)  
全国大学史資料協議会 西日本部会  
2008年度第2回研究会  
於 桃山学院史料室(昭和町資料室)  
参加者 大畑博嗣、小野賢明
- ・2008年10月9日(木)~11日(土)  
全国大学史資料協議会 2008年度総会・全国研究会(西日本部会 2008年度第3回研究会に充当)  
於 琉球大学、沖縄県公文書館  
参加者 松川節(研究所主事、資料室室長、9日のみ)、大畑博嗣
- ・2008年12月8日(月)  
全国大学史資料協議会 西日本部会  
2008年度第4回研究会  
於 京都国際マンガミュージアム  
参加者 大畑博嗣

【調査等】

- ・2008年10月11日(土)  
沖縄県平和祈念資料館、ひめゆり平和祈念資料館  
目 的：『大谷大学百年史』〈資料編別冊・戦時体験集〉の関連として、第二次世界大戦中に沖縄陸軍病院の看護要員として動員され、多くの犠牲者を出した「ひめゆり学徒隊」に関する資料を展示しているひめゆり平和祈念資料館の見学。  
参加者 大畑博嗣

- ・2009年3月12日(木)~13日(金)  
国文学研究資料館、駒沢大学禅文化歴史博物館  
目 的：他大学・他研究機関を視察研修することにより、当資料室における資料保存・公開方法等を参考にするため。  
参加者 日野純悟(研究所事務局)、大畑博嗣、小野賢明

(2009年度)

【他大学との交流】

- ・6月25日(木)  
全国大学史資料協議会 西日本部会  
2009年度総会・第1回研究会  
於 大谷大学(詳細は、報告書を参照)  
参加者 山本和彦(研究所主事、資料室室長)、東館紹見(本学准教授、報告者)、大畑博嗣(報告者)、小野賢明
- ・8月5日(木)  
全国大学史資料協議会 西日本部会  
2009年度第2回研究会  
於 大阪市立美術館  
参加者 大畑博嗣

上記の活動以外にも、大谷大学史資料室では『大谷大学資料』・資料室所蔵写真資料の再調査・長期保存作業を進める一方で、史料の閲覧・貸出や質問などへの対応等日常業務として行った。

\*前号(No.54)で以下の誤記等がありましたので、お詫び申し上げますとともに、訂正させていただきます。

[訂正表]

- ①1頁 「真の人間」となる求道と獲信の実践 本文右段 24行目  
(Engaged Budduism) → (Engaged Buddhism)
- ②9頁 2009(平成21)年度「一般研究」選考結果発表 20行目  
—保育・教育・福祉での教学からの実践への展開— → 教学から実践
- ③32頁 □客員研究員の12行目  
研究課題「アティシヤ大師とチベット仏教の遺欠第理論」 → 遺欠第理論
- ④32頁 □特別研究員の16行目  
研究期間 2009年4月1日~2012年3月31日(新規) → 2010年3月31日(新規)

研 究 所 報 第 55 号

2009年10月1日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435